水戸市埋蔵文化財調査報告　第23集

吉田古墳Ⅲ

史跡整備計画に伴う吉田古墳群第１号墳の第４・５次発掘調査報告書

2009

水戸市教育委員会

口絵写真１　検出された周溝（１）

第13トレンチ（東から）

口絵写真２　検出された周溝（２）

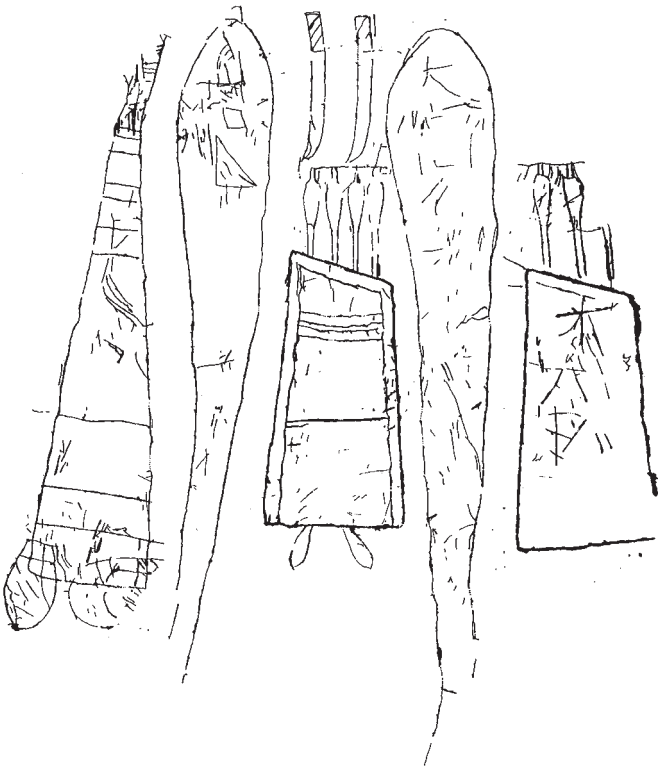
第13トレンチ周溝（北から）

第14トレンチ周溝（南東から）

水戸市埋蔵文化財調査報告　第23集

吉田古墳Ⅲ

－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第１号墳の第４・５次発掘調査報告書－



2009

水戸市教育委員会

序

慶長14(1609) 年，徳川家康の第11男・徳川頼房が水戸に領国を与えられてから，ちょうど400年の月日が経とうとしています。水戸藩の成立は，吉田古墳にとっても大きな出来事でありました。城下町が整備され，吉田地区に江戸街道（水戸街道）が通り，人・物の交流が盛んになるにつれ，吉田地区は城下町近郊農村としての性格を帯びてきます。吉田古墳周辺でも，交通網が整備され，商品作物が栽培されるようになったのでしょう。これまでの発掘調査で，吉田古墳周辺でも活発な土地利用があったことが分かっています。

近世から近代に至る吉田地区の開発は，吉田古墳群の景観を大きく変え，古墳群のなかのいくつかはこの時点で削平されてしまいました。しかし吉田古墳群第１号墳は幸運にもその姿を止め，大正３(1914) 年，第１号墳の奥壁に刻まれた壁画が発見されたのです。発見のニュースにより，吉田古墳は一躍，全国の識者の注目するところとなり，大正11(1922) 年には国の史跡に指定され，水戸市の貴重な文化遺産の一つとして現在に至っています。

本史跡整備事業は，吉田古墳に再び脚光を浴びせることで，地域の歴史をより豊かなものにしながら，地域の活性化をはかっていくことを目的とし，平成17年度より実施しているものです。本書はその３冊目の学術報告書にあたり，吉田古墳群第１号墳の第４・５次調査の成果を収録しています。この調査によって，第１号墳の範囲がおおむね判明し，史跡整備に向けて大きな前進となりました。

水戸市は今後も吉田古墳の史跡整備は着実に進めてまいります。地域住民の皆様をはじめ，市民の皆様にはぜひ郷土の貴重な文化遺産に御関心と御理解を頂き，歴史あるまちづくりに向けて御助力を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます。

平成21年３月

水戸市教育委員会

教育長　鯨　岡　　武

例　言

1　本書は，国指定史跡「吉田古墳」の史跡整備計画に伴い，水戸市教育委員会が国庫補助金と県費補助金を受けて実施した，吉田古墳群の第４・５次調査報告書である。

2　調査は水戸市教育委員会が主体となって実施した。出土品の整理作業は水戸市埋蔵文化財整理センターで行った。

3　遺跡の名称，所在地，調査面積，調査期間等は以下のとおりである。

遺跡名　吉田古墳群（遺跡№.72）

所在地　吉田古墳群第１号墳　茨城県水戸市元吉田町343-1，345，346，347

第２号墳　茨城県水戸市元吉田町372

第３号墳　茨城県水戸市元吉田町613-4

第４号墳　茨城県水戸市元吉田町711

第４次調査　調査面積　107.17㎡

調査期間　2007年11月14日～2008年１月７日

整理期間　2008年１月８日～2009年３月31日

第５次調査　調査面積　4.4㎡

調査期間　2008年10月９日～2008年10月17日

整理期間　2008年10月18日～2009年３月31日

4　発掘調査の組織は別記のとおりである。

5　発掘調査は文化庁文化財部記念物課・茨城県教育庁文化課・水戸市史跡等整備検討専門委員の指導のもと，関口慶久が担当した。第４次調査にあっては中尾麻由実（筑波大学大学院後期課程）が，第５次調査にあっては金子千秋がこれを補佐した。

6　整理作業は，川口武彦・関口・渥美賢吾が担当し，関口が統括した。

7　吉田古墳群の地形測量は株式会社海東測量設計事務所に委託し，関口がこれを監理した。

8　本書の編集は関口が担当し，執筆は川口・関口・渥美が分担した。各項の文責は各文末に記載している。

9　出土した遺物および原図・写真類は，水戸市教育委員会が保管している。

10　発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで，下記の方々および機関より御指導･御協力を賜った。記して謝意を表したい（50音順・敬称略）。

青山俊明　今尾文昭　大塚初重　岡本東三　加藤高蔵　加藤晴代　川崎純徳　瓦吹 賢
黒澤彰哉　後藤道雄　坂井秀弥　澤畑　実　鈴木廣子　清野孝之　日高 慎　山中敏史
米川暢敬

茨城県教育庁文化課　荻谷建設株式会社　株式会社海東測量設計事務所
文化庁文化財部記念物課　有限会社三井考測　明利酒類株式会社

調 査 組 織

事　務　局　鯨岡　武（水戸市教育委員会教育長）
小澤邦夫（水戸市教育委員会事務局教育次長，～2008年３月31日）
内田秀泰（水戸市教育委員会事務局教育次長，2008年４月１日～）
仲田　立（水戸市教育委員会事務局文化振興課長）
中里誠志郎（水戸市教育委員会事務局文化振興課長補佐）
宮崎賢司（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係長）
萩谷慎一（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係主査，2008年４月１日～）
緑川義規（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係主事，～2008年３月31日）
川口武彦（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係文化財主事，～2008年３月31日／同課大串貝塚ふれあい公園文化財主事，2008年４月１日～）
渥美賢吾（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員，～2008年３月31日／同課文化財係文化財主事，2008年４月１日～）
新垣清貴（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員，～2008年３月31日）
木本挙周（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員，～2008年３月31日）
金子千秋（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員，2008年４月１日～）

調査担当者　関口慶久（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係文化財主事）

水戸市史跡等整備検討専門委員（吉田古墳）

専 門 委 員　今尾文昭（奈良県立橿原考古学研究所調査第一課総括研究員）
大塚初重（明治大学名誉教授）
川崎純徳（茨城県埋蔵文化財指導員）
谷口陽子（筑波大学大学院人文社会科学研究科助教）
日高　慎（独立行政法人国立博物館東京国立博物館文化財部列品室主任研究員）

調査・整理参加者名簿

第４次調査・整理　中尾麻由実，久保木きよ子・冨田仁・花田繁二郎・福原雅美・村上巧兒，安島町子・飯田喜代子・柏千枝子・杉崎明美・鈴木加代子・田上雪枝・橋本祥子・広瀬文子・三浦悦子

第５次調査・整理　金子千秋・色川順子，片西登美江・河原井俊吉郎・高安幸且・中山忠雄，安島町子・飯田喜代子・小澤弥代・柏千枝子・杉崎明美・鈴木加代子・須藤裕美・田上雪枝・橋本祥子・人見よね子・平根真由美・広瀬文子・深澤貞子・三浦悦子

凡 例

1　測量平面図および遺構平面図は，国家標準直角座標Ⅸ系に基づく座標値を示し，方位は真北を基準としている。

2　遺構平面図・断面図の縮尺は原則として1/60で統一したが，版組の関係上，第13トレンチのみ1/80の縮尺で掲載した。他の図版の縮尺率は各図版に示したスケールを参照願いたい。

3　遺構断面図及び土層堆積図の標高は，その都度図中に示している。

4　遺構図版中におけるトーン等の表示は，下記に示した凡例図の基準で使用している。

5　遺物実測図の縮尺率はすべて1/3で統一した。

6　掲載した出土遺物実測図のうち，反転復元した図面については，図の中心に▼を示した。

7　遺構･遺物の色調表記は,『新版標準度色帖』（再版,財団法人日本色彩研究所ほか）を基準とした。

8　引用・参考文献は，一括して本書の最後に示した。

10　表紙に使用した写真は，表裏両面とも第４次調査風景である(表紙:第13トレンチ,裏表紙:第14トレンチ)。また中扉の図は斎藤忠氏による吉田古墳壁画の実測図である（斎藤1973より転載)。

凡例図

目　次

序

例言

凡例

目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 ―――― 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 ―――― 2

第１節　行政区分 …… （２）

第２節　地理的環境 …… （２）

第３節　歴史的環境 …… （４）

第Ⅲ章　吉田古墳群第１号墳の第４・５次発掘調査 ―――― 15

第１節　調査の目的と方法 …… (15)

第２節　調査の経過 …… (19)

第３節　基本層序 …… (21)

第４節　発見された遺構 …… (23)

第５節　出土した遺物 …… (32)

第６節　小結 …… (38)

第Ⅳ章　吉田古墳の営造とその意義 ―――― 40

はじめに …… (40)

第１節　吉田古墳の墳形 …… (40)

第２節　吉田古墳の営造年代 …… (41)

第３節　吉田古墳営造の意義 …… (42)

結語 …… (43)

おわりに …… (44)

引用・参考文献 …… (48)

写真図版

報告書抄録

表目次

第１表　周辺遺跡一覧 ･････････････････ 7
第２表　出土遺物観察表 ･････････････････ 35
第３表　出土遺物一覧表 ･････････････････ 36

図版目次

第１図　調査区の位置 ･････････････････ 3
第２図　水戸市域の地形 ･････････････････ 4
第３図　大正期における
古墳周辺の地形 ･････････ 5
第４図　吉田古墳と周辺の遺跡 ･････････････ 6
第５図　吉田古墳群測量図 ･････････････････ 16
第６図　トレンチ設定図 ･････････････････ 17
第７図　第13トレンチ ･････････････････ 24
第８図　第14トレンチ ･････････････････ 26
第９図　第15トレンチ ･････････････････ 30
第10図　第４次調査出土遺物(1) ････････････ 33
第11図　第４次調査出土遺物(2) ････････････ 34
第12図　第１～５次調査で
検出した石室・周溝 ･････････ 39
付　図　吉田古墳群測量図

写真図版目次

口絵写真１　検出された周溝(1)
口絵写真２　検出された周溝(2)

挿図写真１　廃バス撤去状況
挿図写真２　第13トレンチ表土掘削風景
挿図写真３　千波中学校現場見学風景
挿図写真４　第14トレンチ調査風景
挿図写真５　第13トレンチ埋め戻し風景
挿図写真６　第14トレンチ埋め戻し風景
挿図写真７　第15トレンチ調査風景

写真図版１　航空写真・第13トレンチ(1)
写真図版２　第13トレンチ(2)
写真図版３　第13トレンチ(3)
写真図版４　第14トレンチ(1)
写真図版５　第14トレンチ(2)
写真図版６　第14トレンチ(3)
写真図版７　第15トレンチ・作業スタッフ
写真図版８　第４次調査出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯

平成17年度に水戸市が主体となり，国指定史跡「吉田古墳」（吉田古墳群第１号墳）の史跡整備事業が着手されてから,今年度で４年目となる。この間,平成17年度に実施した第２次調査は『吉田古墳Ⅰ』（水戸市教育委員会2006，以下『吉田古墳Ⅰ』）で，平成18年度に実施した第３次調査は『吉田古墳Ⅱ』（水戸市教育委員会2007a，以下『吉田古墳Ⅱ』）でそれぞれ成果を報告しているところである。なお第１次調査は昭和47年に実施された，吉田地区の環境整備計画に伴う学術調査のことを指している。第１次調査後，整備計画は中断を余儀なくされ，調査報告書も未刊のままとなっていたが，前述の『吉田古墳Ⅰ』において，正式報告を掲載している。

周知の如く，吉田古墳は奥壁および側壁に武具等の線刻を有する装飾古墳である（中扉参照）。このことに加え,『吉田古墳Ⅰ』では，古墳の墳形がそれまで定説化していた方墳ではなく，別の墳形である可能性が高いこと，周溝の規模から径約26m程度の墳丘を有していた可能性があることを言及した。さらに『吉田古墳Ⅱ』では，墳形が八角形墳である可能性が出てきたことを報告している。特に線刻を有する装飾古墳で八角形の墳形を有する事例は全国でも皆無であることから，かかるニュースに対し市民は大いに関心を寄せることとなった。一方で確認された周溝は，７世紀後半から畿内の天皇陵を中心として見られるような正八角形ではなく，いびつな屈曲を見せる点や，北側と南側の周溝が確認されていないため，墳形に不明な部分が多い点等が課題となっていた。したがって墳形を確定させ，課題点を検証するための追加調査の必要が指摘されていた。

第４次調査は，かかる問題意識に基づいて平成19年度に実施したものである。平成19年度吉田古墳第４次調査計画は，平成19年７月17日に開催された水戸市史跡等整備検討専門委員平成19年度第２回会議で専門委員より了承され，平成19年11月15日より調査開始，平成20年１月15日に調査が終了した。この調査により，墳丘の西側・東側・南側における周溝は，現況で調査可能な場所はほぼ全て確認したことになった。

なお第４次調査については第14トレンチの一部が国指定地内にかかることから，文化財保護法第125号第１項の規定に基づく現状変更を平成19年７月30日付で申請し（教文第372号），文化庁より同年８月29日付で許可されている（19委庁財第４の863号）。

さて第４次調査中の平成20年１月９日，清野孝之調査官（文化庁記念物課）が吉田古墳を視察し，同時に平成20年度以降の事業方針についての打ち合わせを行った。その結果，これまでの調査成果により，国史跡の追加指定に向けての要件はほぼ満たされたものの，墳丘北側の周溝が全く確認されていない点が，追加指定範囲を確定する時に根拠不足であるとの指導・助言があった。これをふまえ，平成20年度は第５次調査として，北側周溝の範囲確認調査を実施することとなった。

第５次調査は，平成20年10月９日に開始し，10月17日に終了した。なお調査中の10月16日には，水戸市史跡等整備検討専門委員平成20年度第２回会議を開催し，調査成果を報告している。　（関口）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　行政区分

吉田古墳群第１号墳は，北緯36度21分19秒，東経140度28分41秒（日本測地系），地番としては茨城県水戸市元吉田町347ほかに位置する（第１図）。

この地は古代郷里制下にあっては那賀郡吉田郷に属していた。その後律令体制が衰退するにつれ，地方豪族により私称の郡が形成されるようになり，当地においても吉田郡が成立する。その時期は10世紀前半が下限で，12世紀後半には公認されたと推測されている（水戸市史編さん委員会1959）。

鎌倉時代末期から室町時代前期になると，私領の増加および国衙の支配体制の衰退によって郷が分裂し，郷内に村が形成された。かかる情勢下において，吉田郷のなかでも新しい村が誕生し，吉田村が成立したと考えられている（水戸市史編さん委員会1959）。

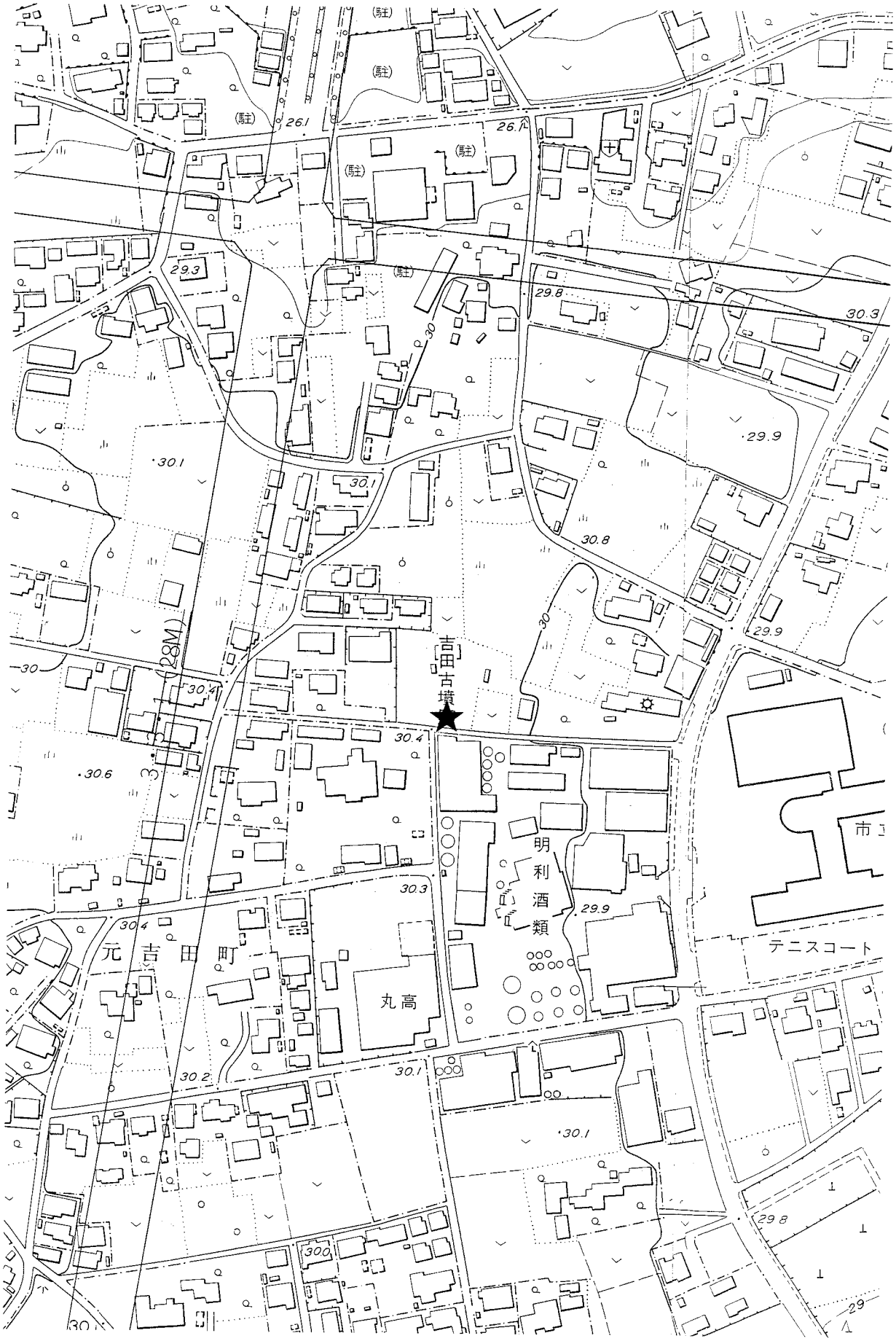
その後，文禄３（1594）年の太閤検地の実施により古代の郡名が復活し，那珂川以南は茨城郡に属すようになった。これにより当地の行政区分は常陸国茨城郡内吉田村として画定され，明治に至る。

明治４（1871）年７月，廃藩置県により水戸を中心とする地域が水戸県となったが，同年11月に廃止され茨城県となった。明治６（1873）年の大小区制導入では，吉田村は第三大区第一小区に編入，明治８（1875）年の大小区改正により第一大区第四小区となった。明治11（1878）年，茨城郡が東西に分かれ，水戸市域は東茨城郡となった。明治15（1882）年と明治17（1884）年には，吉田・吉沢・米沢・東野地区が合併し吉田村連合村を構成し，明治22（1889）年の市町村制実施で吉田村連合村がそのまま吉田村となった。これにより当地域の行政区分は茨城県東茨城郡吉田村大字吉田となり，戦後を迎える。

昭和30（1955）年，吉田村大字吉田は水戸市に合併し，元吉田町となった。なお「元」の字は，明治22（1889）年の市町村制施行で水戸市が誕生した際，吉田村の一部区域が編入され水戸市吉田となっていたため，それと区別するために元吉田町としたものである。

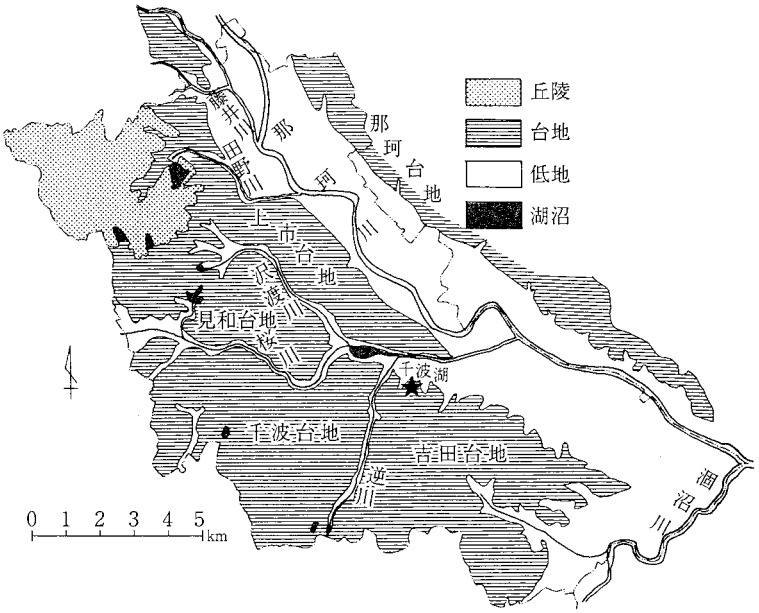
第２節　地理的環境

吉田古墳群周辺の自然地形は，大きく二つの地形に区分される。一つは北部から東部に流れる那珂川とその支流の桜川・涸沼川より構成される沖積低地であり，もう一つは東茨城台地の北東部をなす水戸台地（標高上市台地，見和台地，千波台地，吉田台地等）である。水戸台地には沢渡川，桜川，逆川が開析する支谷が深く入り込み，上市台地，見和台地，千波台地，吉田台地と呼ばれる台地が構成される（第２図）。



第１図　調査区の位置（水戸市都市計画図１/2,500 に加算）

水戸台地の地質は，第三紀層（凝灰質シルト岩。いわゆる水戸層）を基盤岩とし，その上に第四紀洪積層が重なってできている。洪積層の下層は古東京湾が海退するに伴って形成された上市層と呼ばれる砂礫層が堆積しており，上層に浅間山・男体山などの火山活動による降灰で形成された関東ローム層が堆積する。



第２図　水戸市域の地形
（★が吉田古墳，水戸市史編さん委員会 1999 に加筆）

吉田古墳は，水戸台地のうち最も東側にある，標高約30ｍの吉田台地上に位置する。吉田台地の地形をさらに細かく観察すると，鋸歯状に入り込んだ支谷によって複数の小台地が形成されていることがわかる。古墳はその小台地の北側縁辺部に築造された。現在は市街地化が進む中で景観は著しく変化してしまったが，第３図に示した明治年間の地形図から，眼下に千波湖を望む往事の景観を偲ぶことができよう。昭和初年に実地調査した鳥居龍蔵は，「古墳のある位置は廣い丘陵の稍や崖に近い所にあつて，その下は直ちに千波沼で，水戸方面を下に眺望せらるゝ極めてよい場所にある」と述べている（鳥居 1928）。

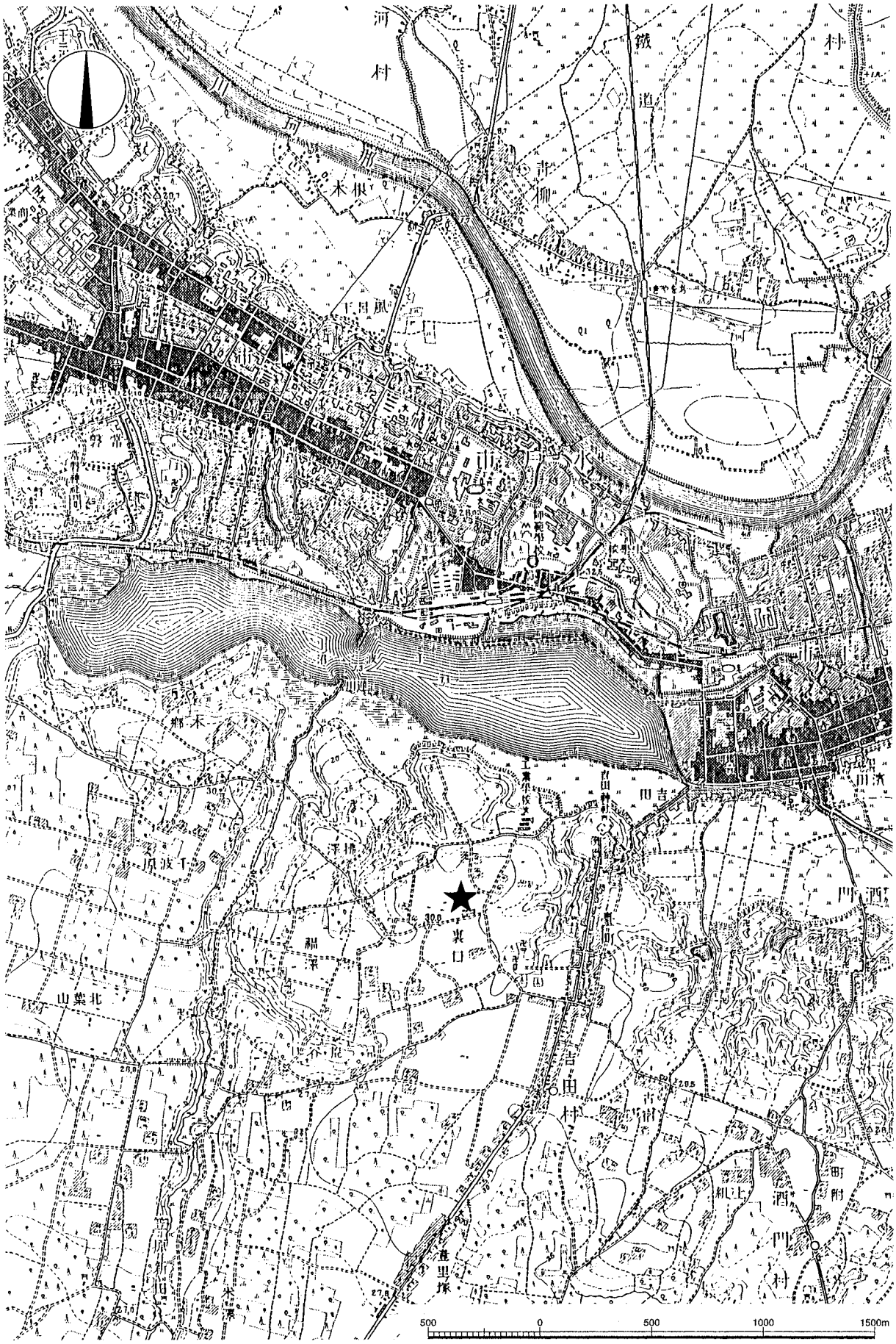
第３節　歴史的環境

（第４図・第１表）

ここでは，吉田古墳をめぐる歴史的環境について，前節で述べた古墳周辺の地理的特徴をふまえつつ，時期別に項目を立てて述べていきたい。

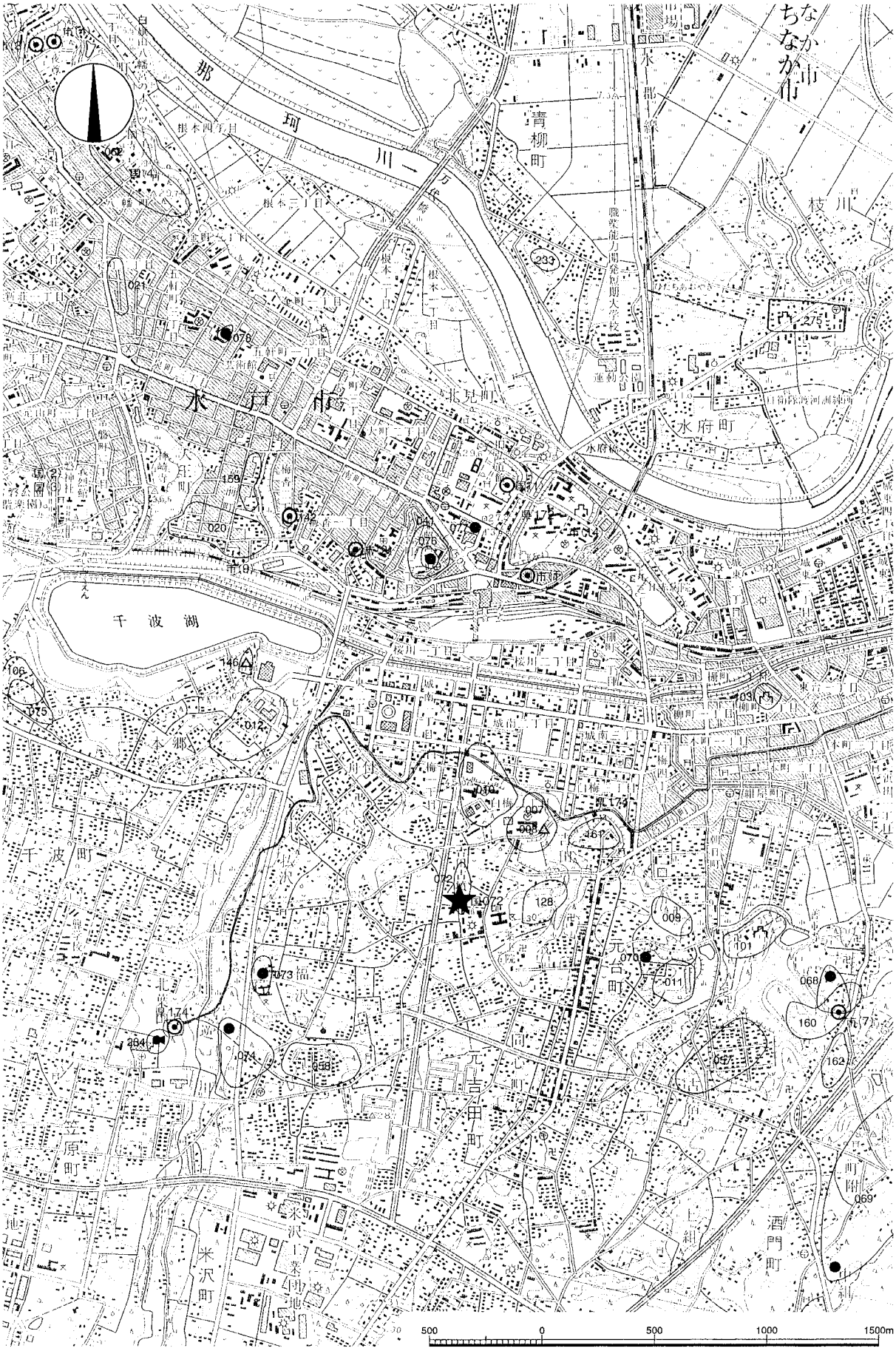
なお古墳周辺の歴史的環境は，北側に接する水戸城とその城下町に象徴されるように，中世～近世の土地利用が特に活発なことは他言を要しないだろう。したがって純粋に遺跡周辺の土地利用を把握しようとするならば，自ずから中世～近世の叙述にウエイトがかかってくる。事実，今回の発掘調査により出土した多くの遺物は中世から近世・近代にかけてのものである（第Ⅲ章）。

しかしながら本報告の主たる目的は，吉田古墳の史跡整備に係る基礎的所見を提示することにある。したがって本節の叙述では，あえて古墳時代に重きを置き，歴史的環境を述べていくこととしたい。



第３図　大正期における古墳周辺の地形

（★が吉田古墳，大日本帝國陸地測量部１/25,000 地形図「水戸」に加算，第４図と同範囲）



第４図　吉田古墳と周辺の遺跡（茨城県遺跡地図１/25,000 に加算，第３図と同範囲，図中の番号は第１表に対応）

第１表　周辺遺跡一覧（遺跡№は第４図に対応）

遺跡№	遺 跡 名	種 別	遺　物	備 考
007	水戸南高校遺跡	集落跡	縄文土器(早～後),弥生土器,土師器(古)	
008	吉田貝塚	貝塚	縄文土器(中),敲石,凹石,石皿,貝輪	
009	安楽寺遺跡	集落跡	縄文土器(中,後),石斧,石錘,凹石,石皿,土器片錘	
010	お下屋敷遺跡	集落跡	縄文土器(前～後),弥生土器(後),土師器(古,平)	S43発掘調査
011	大鋸町遺跡	集落跡	縄文土器(早,晩),弥生土器(後),土師器(古,奈良・平安),須恵器(古,奈良・平安)	S63,H17発掘調査
012	下本郷遺跡	集落跡	縄文土器(中),石斧,凹石	
020	釜神町遺跡	集落跡	縄文土器(中),石斧,石皿,石棒	
021	並松町遺跡	集落跡	縄文土器(中)	
041	東照宮境内遺跡	集落跡	弥生土器	
058	米沢町遺跡	集落跡	土師器,須恵器	
062	茨城高等学校遺跡	集落跡	縄文土器(早,中,後),土師器(奈良・平安),須恵器(奈良・平安)	
068	酒門台古墳群	古墳群	円筒埴輪	後円1?,円2
069	谷田古墳群	古墳群	土師器(古),埴輪(古)	前方後円墳1(2),円墳5
070	大鋸町古墳	古墳		円0(1)
072	吉田古墳群	古墳群	金環,鉄族,刀剣,勾玉	方1,円1
073	払沢古墳群	古墳群		円0(2)
074	福沢古墳群	古墳群		円3(4)
075	千波山古墳群	古墳群		後円1,円2
076	東照宮境内古墳群	古墳群		円0(3)
077	無名古墳	古墳		円0(1)
078	五軒町古墳群	古墳群		円0(2)
101	吉田城跡	城館跡		
103	武熊故城	城館跡		
106	千波山遺跡	城館跡	縄文土器(中),打製石斧,石鏃	
128	薬王院東遺跡	集落跡	縄文土器(中),弥生土器(後),土師器(奈良・平安),須恵器(奈良・平安)	H1発掘調査
142	梅香火葬墓跡	火葬墓	須恵器(奈良・平安)	
146	柳崎貝塚	貝塚	縄文土器(早,前)	
152	田野台遺跡	集落跡	縄文土器,土師器(古),須恵器	
159	幸町遺跡	集落跡	縄文土器	
160	酒門台遺跡	集落跡	弥生土器(後),土師器(古,奈良・平安),須恵器(奈良・平安),土師質土器,陶器	
161	吉田神社遺跡	集落跡	弥生土器(後),土師器(古),須恵器	
162	荷鞍坂遺跡	集落跡	弥生土器(後),土師器(古,奈良・平安),須恵器(奈良・平安),円筒埴輪,形象埴輪,陶器	
172	水戸城跡	城館跡	丸瓦,平瓦,釘,扉金具,陶磁器,土器	
174	笠原水道	水道跡	石樋	
233	青柳町遺跡			
234	笠原古墳群			
275	枝川城跡	城館跡		ひたちなか市
国(1)	旧弘道館			国指定特別史跡
国(2)	常磐公園			国指定史跡
国(3)	常磐公園			国指定名勝
国(4)	白旗山八幡宮のオハツキイチョウ			国指定天然記念物
市(1)	義公生誕の地			市指定史跡
市(2)	藤田東湖生誕の地			市指定史跡
市(3)	常磐共有墓地			市指定史跡
市(4)	水戸殉難志士の墓			市指定史跡
市(7)	酒門共有墓地			市指定史跡
市(9)	光藻			市指定天然記念物
市(14)	水戸城跡の大シイ			市指定天然記念物

（茨城県教育庁文化課2001,水戸市教育委員会1999をもとに作成）

第１項　先土器時代の様相

那珂川流域の先土器時代遺跡は，ひたちなか市や水戸市において確認されているものの，調査が先土器時代の調査を目的にしない場合が多く，その様相は必ずしも明確ではない。

吉田台地では，涸沼川の支流である石川川によって開析された谷の南側台地上にある森戸遺跡において，尖頭器をはじめとする剥片資料がわずかながら出土している（常澄村史編さん委員会1989）。吉田古墳の東南約１㎞に位置する大鋸町遺跡第３地点では，９世紀前半の竪穴住居址覆土中からではあるが，チャート製の尖頭器が出土している（東京航業研究所2006）。また栗崎町や下入野町で採集された資料を川口武彦氏が報告しており（川口2002・2005），徐々にではあるが当該期の生活を窺う資料は増加しつつある。

第２項　縄文時代の歴史的環境

縄文早期末から前期前半にかけて，縄文海進がはじまり，現在の海岸線から直線距離で十数キロ奥に入った吉田古墳周辺まで及ぶようになる。この時期の貝塚としては，千波町の柳崎貝塚，谷田町の谷田貝塚などで発掘調査が行われている（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。当該地周辺においてこの時期の集落は現段階では確認されていないが，薬王院東遺跡の発掘調査では縄文早期土器の破片が出土しており，土地利用の痕跡がわずかながら窺える（水戸市薬王院東遺跡発掘調査会1990）。このほかに元吉田町の横宿遺跡で縄文早期の田戸下層式土器が採集されている（水戸市教育委員会1999）。

縄文中期から後期になると遺跡数が増加し，集落の規模が広がる傾向が窺える。吉田台地では元吉田町にある下畑遺跡の発掘調査が実施され，約30基の袋状土坑が検出されている。出土土器の中心は中期後半の加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期である。住居址は１件のみ検出されているが，これは調査区が限定されていたためで，袋状土坑集中区の周辺に相応の集落が展開していたことはほぼ確実である（水戸市下畑遺跡発掘調査会1985）。谷田町の下の内遺跡では，陸田造成時に不時発見され遺跡の大部分は調査されず削平を余儀なくされたが，縄文中期から晩期後葉に至る土器群，土製品，骨角器，多様な石器類が出土した（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。また大鋸町遺跡第２地点では加曽利Ｅ式最終末段階の土坑群が検出されている（地域文化財コンサルタント2005）。

この時期の貝塚としては，吉田古墳の北方に吉田貝塚が挙げられよう。昭和37（1962）年配水管埋設工事に伴い不時発見された。厚さ40㎝の貝層が６ｍ×１ｍの範囲で確認され，縄文中期～中期の土器片や石器類，貝輪などが出土している（茨城県教育委員会1982）。また昭和61（1986）年に道路舗装補修工事に伴い貝塚隣接地で確認調査が実施されており，厚さ10～15㎝の貝層が確認されていることから，貝塚は現在の包蔵地範囲からさらに広がることが想定される（郡司1992）。

縄文晩期になると，遺跡数自体が減少しその様相が極端に不透明になる。吉田台地では，さきに触れた下の内遺跡の調査において，縄文晩期中～後葉を主体とする土器群が出土している。土器群には東北地方に分布するものも相当数認められ，安行系文化と亀ヶ岡式文化の漸移地域としての特色を窺わせる資料群として位置づけられる（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979）。

第３項　弥生時代の歴史的環境

弥生時代の遺跡は，茨城県下では一般的に中期前半から認めれることが知られているが，吉田台地での調査事例は後期に至って確認されるようになる。

元吉田町のお下屋敷遺跡では，土砂採取工事に伴い不時発見されため限定的な調査を余儀なくされたが，十王台式期に属する住居址５軒と，それに後続する時期の住居址１軒を検出している（茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編1979)。

吉田古墳群に東接する薬王院東遺跡の発掘調査では，後期の竪穴住居址10軒，竪穴状遺構１期が検出されている。また平成20年度に実施した同遺跡第２次調査（試掘調査）でも集落跡が検出され，吉田台地上における弥生時代集落の分布は更に広範囲にわたることが窺える。吉田古墳第２次・第３次調査においても十王台式を中心に弥生土器片が相応数出土していることから（『吉田古墳Ⅰ』・『同Ⅱ』)，吉田古墳群内に弥生時代後期集落が及んでいる可能性は極めて高いと言えよう。

また吉田古墳の東南に位置する大鋸町遺跡は，これまで５次にわたる本発掘調査が実施され，９軒の住居址および土坑群が検出されている。さらに塙坪遺跡(酒門町)，横宿遺跡(元吉田町)，酒門台遺跡(酒門町)，吉田神社遺跡（宮内町)，荷鞍坂遺跡（酒門町）などにおいても，分布調査により弥生後期の十王台式土器が採集されている（水戸市教育委員会1999)。

以上のように，吉田古墳周辺では弥生後期より徐々に集落が営まれるようになり，土地利用が活発となっていく傾向が見受けられるのである。

第４項　古墳時代の歴史的環境

那珂川流域はかねてより仲国造の支配領域に比定されており，分布する古墳はその関連性が論じられてきた。

吉田台地における古墳時代前期に比定される遺跡の調査事例としては，大鋸町遺跡（前掲)，お下屋敷遺跡（水戸市教育委員会1999)，大串遺跡（常澄村教育委員会1986，水戸市1996)，北屋敷古墳（水戸市1995)，薄内遺跡第１地点（毛野考古学研究所2008）等が挙げられる。性格はいずれも集落跡であり，弥生時代後期に引き続き，那珂川下流域において相応の土地利用がなされていたことが窺える。

当該期の古墳については，吉田台地上では現在のところ認められていない。古墳出現期の事例は，那珂川を吉田地区よりさらに上流に遡った，藤井町の二の沢Ｂ遺跡の１号周溝墓・２号周溝墓・６号周溝墓が挙げられよう（茨城県教育財団2003)。これら３基の周溝墓は前方後方形を呈しており，那珂川下流域における出現期古墳のなかでも最初期に位置づけられる。また飯富町の安戸星古墳１号墳も前方後方墳であり，二の沢Ｂ遺跡の前方後方形周溝墓と同様の時期に造営されたものと考えられている（日高2004)。

これに続く古墳としては，鹿島灘に面する丘陵上に位置する，大洗町の坊主山古墳（前方後方墳，全長50m)，鏡塚古墳（前方後円墳，全長105.5m)，車塚古墳（円墳か，直径95m）が代表例として挙げられる。坊主山→鏡塚→車塚の順築造されたことが墳形から推測されており（茂木1987)，鏡塚古墳の築造年代は４世紀末に比定される（内原町教育委員会1999)

古墳時代中期の古墳としては，吉田古墳の北西，上市台地上の愛宕山古墳（前方後円墳，全長136.5m）およびその東側に隣接する姫塚古墳（前方後円墳，全長58m）が挙げられる。愛宕山古墳は採集埴輪の分析から５世紀前半の築造と推測されている（内原町教育委員会1999）。

吉田古墳周辺における当該期の集落跡としては，大鋸町遺跡（前掲）が発掘事例として挙げられる。

古墳時代後期･終末期になると，那珂川流域の各地に集落が営まれるようになる。吉田台地上では，小仲根遺跡（水戸市教育委員会2002），大鋸町遺跡（前掲），下畑遺跡（前掲），梶内遺跡（水戸市1995），大串遺跡（前掲）などで発掘調査が実施され，６世紀から７世紀前葉に至る住居址が検出されている。

川口武彦氏は当該期の集落の様相について，市内で確認されている集落が軒並み７世紀前半でその営みを停止する中，ひとり台渡里遺跡が７世紀後半の集落として認められることに注目し，「以上のような後期・終末期の集落跡の動向を見ると，５世紀後葉から７世紀前半まで継続的に営まれていたものが，７世紀前葉遺構に形成が途絶え，７世紀の後半に至って，後に郡衙が営まれる地域の近隣（＝筆者註：台渡里遺跡周辺）に突如として形成し始めるという現象が指摘できようか」と述べている（水戸市教育委員会2004）。

以上のような終末期の集落形成のあり方は，吉田古墳，そしてそれに後続もしくは併行して営まれていった，渡里町域を中心とする那賀郡衙・郡寺の展開過程に直接関わる重要な知見として留意すべきであろう。

後期・終末期の古墳についても，集落同様，市内各地に営まれるようになる。後期古墳としては北屋敷古墳群（大串町），荷鞍坂遺跡（酒門町），大串古墳群（大串町），富士山古墳群（田谷町），小原内古墳群（田谷町），赤塚古墳群（河和田町），加倉井古墳群（加倉井町），牛伏古墳群（牛伏町）が，終末期古墳としてはニガサワ古墳群（藤井町），西原古墳群（堀町），白石古墳群（田谷町），高天原古墳群（河和田町），大井古墳群（飯富町），吉田古墳群（元吉田町），フジヤマ古墳（栗崎町），谷田古墳群（酒門町），権現山横穴墓群（下国井町）が挙げられる。

このうち発掘調査によって具体的な様相が報告されている事例としては，北屋敷古墳群（茨城県教育財団1993，水戸市1995），牛伏古墳群（内原町教育委員会1999），ニガサワ古墳群（茨城県教育財団2003），荷鞍坂遺跡（整理中），そして吉田古墳群（水戸市教育委員会2006）がある。

北屋敷古墳群は２基存在し，第１号墳は円墳で，横穴式石室内から直刀・小刀・鉄鏃などの副葬品が出土している。第２号墳は墳形を確定できていないが，裾部から円筒埴輪･人物埴輪などが出土し，古墳の造営は６世紀後半に比定される。

牛伏古墳群は前方後円墳７基，円墳９基から構成される一大古墳群で，５世紀末から６世紀後半にかけて連綿と営まれたことが判明している。

ニガサワ古墳群は前方後円墳４基と円墳１基から構成され，いずれも埴輪は出土していない。６世紀後半から７世紀前葉にかけて造営されたとみられる。

吉田古墳群は装飾古墳である第１号墳（国指定史跡）を中心に多くの研究者による調査が行われた。その研究史についてはすでに『吉田古墳Ⅰ』において纏めており，詳細はそちらを参照されたい。発掘調査はこれまで３回にわたって行われている（第１次調査:昭和47年，第２次調査:平成17年，第３次調査:

平成18年)。第１次調査では墳丘・周溝・石室・線刻壁画の一連の調査が初めて実施された。石室構造から７世紀前半代の築造とみられる。

第２次調査では，検出した周溝から約26mの規模を有していたことが判明した。那珂川下流域では大型古墳に継ぐ規模であったことが窺える。また墳形については，従来定説であった吉田古墳＝方墳説に対し，周溝が方形に巡らない可能性が高いことが判明した。古墳時代の出土遺物としては，埴輪片が４点出土している。これらは第１号墳に近接して築造された古墳（すでに削平されている）のものである可能性が高く，古墳群としての吉田古墳を窺う上で重要な資料といえる。

第３次調査では，墳丘の東西から緩やかな稜角を有する周溝が検出された。既調査の周溝もあわせて周溝プランを検討した結果，八角形墳である可能性が高いと判断するに至った。出土遺物は第２次調査同様，埴輪片が中心であるが，そのうち１点が雲母を多量に含んでおり，筑波山周辺に分布する埴輪の胎土と酷似しているという，注目すべき事実が報告されている。このことは後述する４次調査においても同様であり，吉田古墳の性格を占う上で重要な事項として位置づけられる。

さて，ここに列挙した古墳群のほかにも，市内には年代不詳の古墳群が多く確認されており，その中には後期・終末期に営まれた古墳は少なくないものと推測される。かかる傾向は吉田台地上においても同様であり，大型古墳の終焉→群集墳の増大という，全国的な趨勢≒支配体制の変革が当地においても進行していたことを示唆していよう。

また那賀川下流域は装飾古墳が比較的集中して分布することが知られており，那珂川右岸には吉田古墳と権現山横穴墓群が，那珂川左岸にはひたちなか市虎塚古墳，金上殿塚古墳が那珂台地上に営まれている。とくに虎塚古墳が立地する中丸川流域には，笠谷古墳群，大平古墳群，三反田古墳群，十五郎横穴墓群などの古墳・横穴墓が集中しており，奥津城が連綿として造営された「聖なる地」として位置づけられる。

これらの装飾古墳は各モチーフに共通点が多く，相互に何らかの連関があって造営されたことはほぼ疑いない。吉田古墳の被葬者像を窺う上で虎塚古墳を中心とした中丸川流域の古墳群の造営のあり方は留意すべきであろう。

第５項　奈良・平安時代の歴史的環境

水戸市市域における奈良・平安時代の遺跡としてまず挙げられるのは，渡里町一帯を中心に分布する，台渡里廃寺・アラヤ遺跡・長者山遺跡・渡里町遺跡・文京２丁目遺跡・台渡里遺跡・堀遺跡・西原遺跡などの一大遺跡群である。これらの遺跡群は，いわゆる「郡寺」を示唆する遺構・遺物を豊富に包蔵する台渡里廃寺をはじめ，政庁院・正倉院・寺院・集落が一体となった官衙関連遺跡である「台渡里遺跡群」として理解されており，古代那賀郡の中枢域であった。

また台渡里廃寺に東接して古代官道である東海道が敷かれ，それに伴い那珂川右岸に河内駅家が設置されたことが『常陸国風土記』に記載されてるように，この地は東北経営の前線として中央政権下にあっても相応に重要視されていたことが窺える。

このような律令期における台渡里遺跡群の性格を考えるとき，遺跡群と吉田古墳とは地理的には若

干の距離があるものの，７世紀後半以降の歴史的環境を考える上で両者の関連性は常に留意する必要がある。

吉田古墳周辺における奈良･平安時代の遺跡としては，お下屋敷遺跡（前掲），薬王院東遺跡（前掲），大鋸町遺跡（前掲），東組遺跡第１地点（整理中），町付遺跡第１地点（整理中）で発掘調査が実施され，いずれも集落跡が検出されている。大鋸町遺跡第１次・第２次・第３次調査では８世紀第２四半期から９世紀代を主体とする約30軒の住居址が，吉田古墳に隣接する薬王院東遺跡では８世紀後半～９世紀にかかる38軒の住居址や工房跡が検出され，８世紀代に集落が活発に営まれる状況が窺える。吉田古墳の第２次調査（前掲）においても，周溝覆土上層から８世紀第４四半期～９世紀代１四半期の須恵器坏が出土している。

このほか塙坪遺跡（酒門町），酒門台遺跡（酒門町），吉田神社遺跡（宮内町），荷鞍坂遺跡（酒門町）などで当該期の遺物が採集されており，その散布状況から集落の存在が窺える。

９世紀に至り，律令体制による中央集権体制が衰微していくなかで，弘仁３（812）年，河内駅家が廃止され，10世紀第１四半期には台渡里廃寺も廃絶する。

この９世紀から10世紀に至る間に，吉田神社が次第に勢力をもち，第１節で述べたように10世紀前半には吉田郡が那珂郡から独立するほどの政治的・宗教的勢力となる。このような平安時代以降の状況について時野谷滋氏は「すでに平安時代初期の水戸地方では，繁栄の中心が渡里台地方面から，千波湖低地帯を越えてしだいに吉田台地方面に移動しており，その後この地方には，吉田神社の神威がおおうとともに，（中略）かつ吉田薬王院および元石川町の円照寺を中心とする天台宗が弘通していたのである」とまとめている（水戸市史編さん委員会 1963）。

このように吉田神社は那珂川流域における新興勢力として在地支配を行うようになるが，それに後続して武士団が吉田郡に進出していき，12世紀前半までには常陸平氏である吉田氏が郡司となり，在庁官人として吉田郡を勢力下に置き，吉田神社との軋轢を生みながら中世を迎える。

第６項　中世の歴史的環境

鎌倉幕府が成立すると，吉田郡内は吉田氏およびその一族である石川氏・馬場氏が御家人となり，地頭として在地支配を行った。吉田氏の居館として有力視されているのが，常照寺境内を中心として遺構が残る，吉田城跡である。発掘調査は実施されていないが，詳細な縄張図が作成され，藤木久志氏による分析が行われている（水戸市史編さん委員会 1963）。また馬場氏は千波湖を挟んだ上市台地上，現在の水戸城付近に居を構えたと推測されている。

その後南北朝の争乱のなか水戸地方には江戸氏が進出し，馬場氏から水戸城を奪取してこの地を本拠とするようになる。平成18年度・平成20年度に水戸市教育委員会が実施した水戸城二の丸跡の発掘調査（整理中）では，江戸氏が大規模な普請・作事を行っていたことが判明し，15～16世紀における江戸氏の勢力が並々ならぬものであったことが窺えた。

中世末には豊臣政権のもと佐竹氏が常陸国を統一し，水戸城を居城として拡張・整備した。ここに至って吉田城は廃城になったと藤木氏は述べている（前掲）。

吉田古墳周辺の中世期の遺跡は，大鋸町遺跡第２地点の発掘調査（前掲）で龍泉窯系の青磁碗など中世を通じて若干の遺物が包含層中より出土しているほか,大鋸町遺跡第７地点(整理中)･第８地点(整理中）において幅８ｍ，深３ｍの堀が検出され，吉田城と大鋸町遺跡，そして両遺跡に接しながら水戸城下に通鶴江戸街道の関連性が近年急速に注目されつつある。また，吉田古墳の西側一帯においても，米沢町遺跡第６地点（水戸市教育委員会 2009）等における発掘調査で15～16世紀代に比定される遺構・遺物がわずかながら検出している。

このように中世の吉田台地は，在地武士団による目まぐるしい割拠のなかで，吉田郡の中心地として常に攻防が繰り返されつつ，その拠点は徐々に上市台地の水戸城に移っていったという推移が辿れるのである。

第７項　近世の歴史的環境

近世初頭，佐竹氏の秋田移封，武田信吉入封を経て，慶長14（1609）年徳川頼房の入封を以て，御三家水戸徳川家による水戸藩が成立する。水戸城を居城として城下町は整備され，吉田台地の一部もそれに伴い城下町に取り込まれた。大鋸町遺跡も城下町内にあり，第２次調査（前掲）では鉄滓や鞴の羽口など生産に関わる遺物が出土している。「大鋸町」という地名から木挽職に関わる町人地であったことが推測され，大工道具の直しなど小規模な鍛冶工房が存在していたのであろうか。

近世の吉田地区の土地利用を考える上で，長岡から吉田に至り，下市に抜ける幹線道路である江戸街道の存在抜きには語れないだろう。江戸街道は藩主や家臣が江戸と国元を往来する道として，また東北諸藩の参勤交代の道筋として重要な位置を占めると共に，台地際に位置する吉田神社周辺は，有事の際の軍事的拠点としても重要視されていたことと思われる。

吉田古墳周辺は水戸街道からやや離れており，城下町の範囲からは外れていた。しかし城下町近郊農村として，商品作物などの需要は相当高かったものと思われ，土地利用は比較的活発であったことが想定される。それを反映するかのように，吉田古墳の２次調査においても17世紀～19世紀にかかる近世遺物が比較的多く出土している。吉田古墳の墳丘が極端に小型化した理由として，このような近世期における開墾による影響も充分考えられるのではなかろうか。

また安政年間，吉田古墳に南接して加藤氏が酒造業を創業した（現在の明利酒類株式会社)。

第８項　近代の歴史的環境

水戸市は明治42（1909）年より第14師団編成下の歩兵第二連隊を中核とした陸軍衛戍が置かれ，また「満蒙」開拓のため義勇軍訓練所が設立されるなど，日露戦争後からアジア・太平洋戦争にかかる時期は軍都としての側面を有していた。

吉田古墳の２次調査において統制番号を付した磁器碗が出土しており，かかる軍事的要素の濃い遺物は，吉田地区の近～現代の土地利用を考える上で重要な資料として位置づけられる。また，第２・３次調査において近代遺物は最も出土率が高く,活発な土地利用を窺わせる。吉田古墳壁画の発見も，地元の加藤徳之助氏（明利酒類株式会社の加藤氏とは別）が採土のために墳丘を取り崩したことによる

ものである。このように吉田地区における土地の改変は近代以降急速に進み，現在に至るのである。

（関口）

＊本章は『吉田古墳Ⅱ』（水戸市教育委員会 2007）所収の「第Ⅱ章　遺跡の位置と環境」に，その後の調査成果をふまえ適宜加筆・訂正したものである。

第Ⅲ章　第１号墳の第４・５次発掘調査

第１節　調査の目的と方法

第１項　発掘調査（第６図）

第４次発掘調査

第４次発掘調査は，周溝プランの確認によって墳形を把握することと，二重周溝の可能性を検証することを目的としている。

発掘トレンチについては，墳丘東側に１本（第13トレンチ），南側に１本（第14トレンチ）の計２本を設定した。トレンチの名称は，第１次調査のトレンチ№.（第１トレンチ～第５トレンチ）・第２次調査のトレンチ№.（第６トレンチ～第９トレンチ）および第３次調査のトレンチ№.（第10トレンチ～第 12 トレンチ）を引き継いで連番にすることとし，第13トレンチ～第14トレンチと称した。

各トレンチの設定方法については以下の通りである。

第13トレンチ　本トレンチは，周溝の東側，第８トレンチと第12トレンチの中間に設定した。第３次調査時までは，本トレンチの一部に廃バスが存在しており調査が難しかったが，地権者の同意を得てこれを撤去した。トレンチの西半分は周溝プランを確認するために調査面積を比較的広く設定し，東半分は二重周溝を検証するために幅約２ｍで敷地内ぎりぎりまで東に伸ばした。敷地内の樹木を避けながらのトレンチ設定を余儀なくされたため，トレンチの形状はやや複雑で，面積は87.75㎡である。

第14トレンチ　第１トレンチと第１トレンチ南拡張部との間に設定した。南側の周溝の範囲確認を目的としたものである。トレンチの一部が第１トレンチに重なり，また半分以上は国指定地内にかかる。トレンチの南側と東側には市道が接し，北側は吉田古墳の案内看板３基があることから，設定は道路と看板の間の掘削を余儀なくされ，必ずしも十全の設定が叶ったわけではない。トレンチの面積は19.42㎡である。

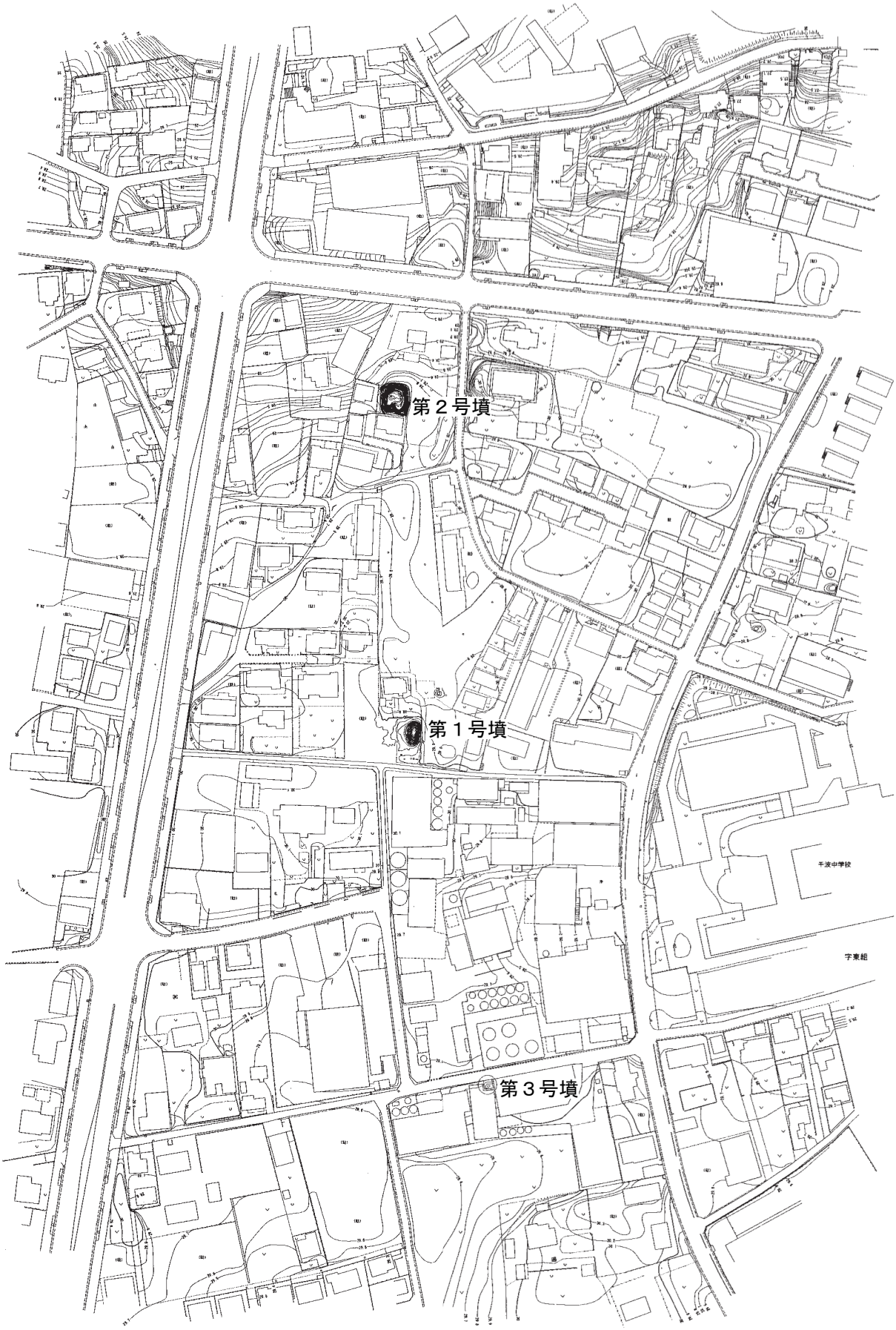
表土掘削は重機（φ0.25バックホー）によって行い，遺構確認面である関東ローム層上層から人力による掘削を行った。

周溝の調査については，史跡整備を目的とした調査であることから，上面プランによる確認を原則とした。しかし遺構の性格・構築年代・廃絶年代等を確認するため，適宜サブトレンチを設定し，必要最小限の掘削を行った。

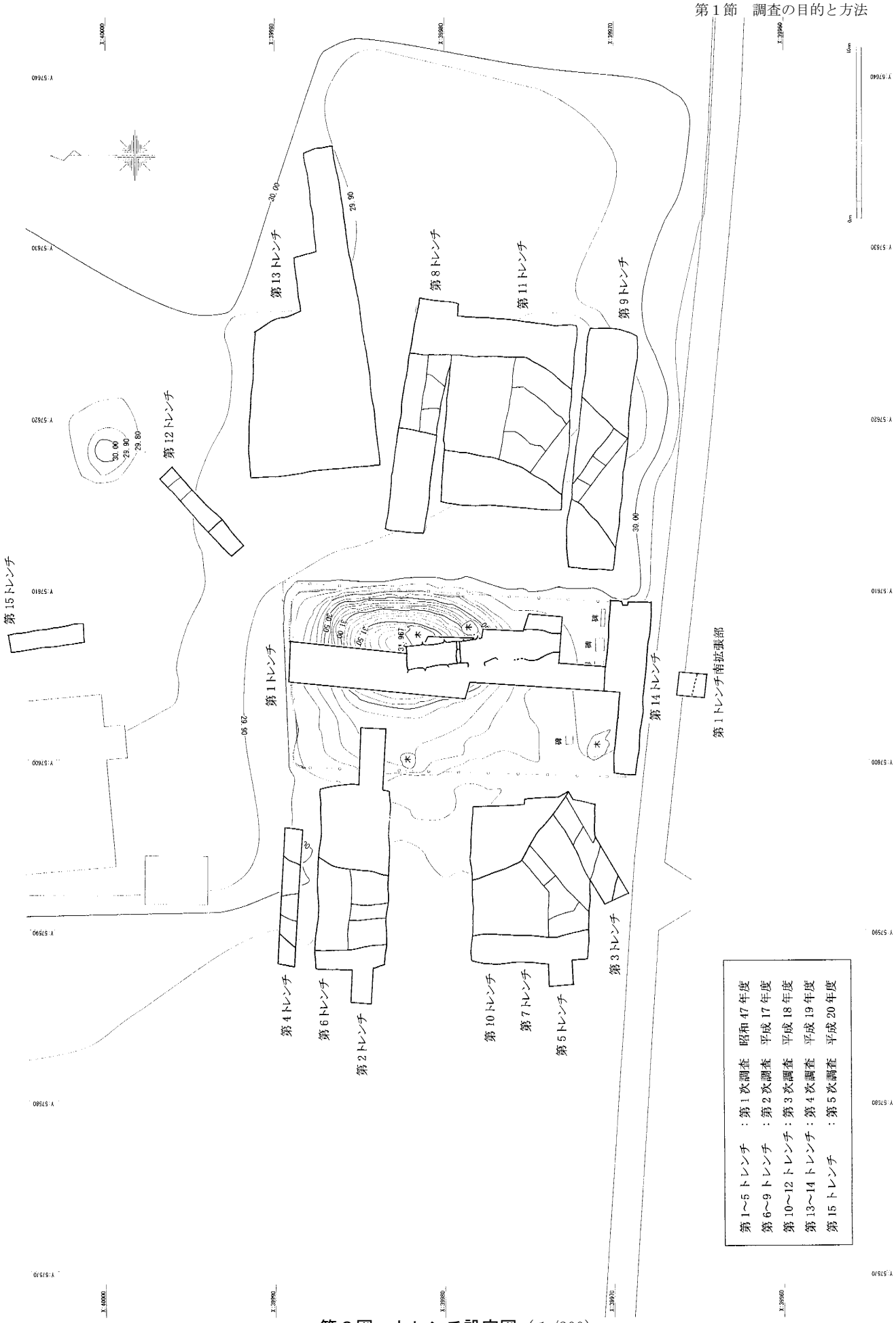
平面図は４ｍ間隔のグリッドを設定し，遣り方測量により1/20縮尺で作成した。微細図は1/2縮尺で作成した。グリッド杭は公共座標第Ⅸ系に基づいた観測を行い,座標上にトレンチの位置を乗せた。

断面図はすべて1/20縮尺で作成した。

記録写真については600万画素のデジタルカメラ，35㎜カラーリバーサルフィルムを用いて撮影し



第５図　吉田古墳群測量図（1 /2,500，図上が真北，詳細は付図参照）



第６図　トレンチ設定図（1/300）

た。全景撮影は，明利酒類株式会社の協力を得，古墳に隣接する同社工場敷地内のタンクに登らせて頂いて撮影したほか，高所作業車上より撮影した。

埋め戻しは，周溝に山砂を敷いた上で，重機により発生土で埋め戻した。

第５次発掘調査

第５次調査は，墳丘北側の周溝プランを検出し，以て周溝の概ねの範囲を確定することを目的としている。発掘トレンチは墳丘北側の私有地（元吉田町356，358-2にまたがる部分）に4.4m×1.0mのトレンチ（第15トレンチ）を設定した。面積は4.4mである。

掘削･埋め戻しはすべて人力によって行った。今次調査は周溝プランの確認を目的としたことから，周溝覆土の掘削は行っていない。

平面図はトータルステーションによる計測により1/20縮尺で作成し，座標上にトレンチの位置を乗せた。また断面図はすべて1/20縮尺で作成した。記録写真は600万画素のデジタルカメラ，35㎜カラーリバーサルフィルムを用いて撮影した。

第２項　整理作業

遺構　遺構については，図面台帳の作成，写真整理などの基礎作業をまず実施した。その後平面図・セクション図・写真記録の３つを相互に検討し，いくつかの図面について修正を加えて掲載した。

遺物　遺物は遺物収納箱にして３箱が出土し，これを水戸市埋蔵文化財整理センター及び水戸市埋蔵文化財柳河収蔵庫に収蔵し，水洗・注記・接合作業を行った。

出土遺物の注記については全点注記を行っている。注記名は水戸市内遺跡の統一注記方法に基づき，遺跡･地点番号を示す「ミ72-01」の後ろに出土地点（例えば第14トレンチ内攪乱出土の場合は「14Tカク」）を記入した。

実測個体の選出については，周溝内出土遺物および，古墳造営・廃絶に関わる資料を優先的に掲載した。しかしながら出土遺物の多くは表土もしくは攪乱内出土であり，古墳の造営・廃絶について窺うことのできる資料は多くない。ただし表土・攪乱内出土とはいえ，出土遺物の様相から客土によるものではなく，おおむね遺跡の土地利用を反映する資料であると判断したため，縄文～現代の遺物に至るまで，遺存度のよい遺物は掲載した。ただし同一器形・同一意匠の遺物は，遺存度がよくても図化していない。図化した遺物は全て観察表を添え，写真を掲載した。写真撮影は600万画素のデジタルカメラを使用した。また，出土した全ての遺物について分類・カウントし，第３表に掲載した。

以上の整理方法は第２・３次調査におけるそれと全く同一であり，『吉田古墳Ⅰ』･『同Ⅱ』･『同Ⅲ』の報告書を対照できるよう努めた。

第２節　調査の経過

第４次調査

調査面積にして107.17㎡を開放している。発掘調査は2007年11月15日～2008年１月15日までの間，年末年始や別遺跡の緊急調査などで中断を余儀なくされつつも，実働18日間をかけて行った。

2007年11月14日（水）　機材搬入。今回は古墳の東側および南側にトレンチを入れる関係から，墳丘北東にあった廃バスを撤去。また，国指定地を廻るフェンスの南側を外した。

2007年11月15日（木）　調査初日。第13・14トレンチ設定後，重機にて表土剥ぎ。

第13トレンチの重機掘削は，ロームが少し見え始めたレベルで止める。本遺跡は漸移層が厚く，このレベルでは周溝は確認できないため，ここからは人力で慎重に掘削することにする。

第14トレンチの重機掘削は，表土から数十㎝あたりで近現代の硬化面が検出されたことからここで止め，近代面より人力での掘削を開始する。本日で重機掘削は終了。

2007年11月16日（金）　調査２日目。人力での表土剥ぎ。第13トレンチのプラン検出状況を明利酒類のタンクの上から撮影。第14トレンチは近代面に遺構がなかったことから手掘りで面下げを開始。面下げ途中で調査終了。

千波中学校の社会科の授業の一環で，生徒達100数十人が現場見学。

2007年11月20日（火）　調査３日目。第13トレンチの杭打ち。第14トレンチは面下げを継続。

2007年11月21日（水）　調査４日目。第13トレンチを拡張。第14トレンチの面下げ終了。

挿図写真１　廃バス撤去状況

挿図写真２　第13トレンチ表土掘削風景

挿図写真３　千波中学校現場見学風景

挿図写真４　第14トレンチ調査風景

2007年11月22日（木）　調査５日目。第13トレンチの拡張終了。第13トレンチ・第14トレンチのプラン検出状況を撮影。明日から長い中断に入るため，現場を養生して終了。

2007年11月26日～12月11日　笠原水道発掘調査のため中断。

2007年12月12日（水）　調査６日目。第13トレンチ･第14トレンチの周溝にサブトレンチを設定･掘削。

2007年12月14日（金）　調査７日目。引き続きサブトレンチの掘削。

2007年12月17日（火）　調査８日目。第14トレンチ北壁のセクション図作成，第14トレンチのサブトレンチ２本（I-Jライン，G-Hライン）のセクション図作成。第14トレンチの平面図作成。

2007年12月19日（水）　調査９日目。第13トレンチ北壁，南壁のセクション図作成。第13トレンチの平面図作成。

2007年12月20日（木）　調査10日目。第13トレンチ南壁のセクション図・平面図作成。

2007年12月21日（金）　調査11日目。第13トレンチの周溝サブトレンチのセクション図作成。水戸市史跡等整備検討専門委員平成19年度第３回会議開催，現場視察。

2007年12月25日（火）　調査12日目。第13トレンチの壁面の写真撮影

2007年12月26日（水）　調査13日目。第13トレンチ全景撮影，サンプリング，埋め戻し。年末年始のため現場を養生。

2007年12月28日（金）　第13トレンチのある敷地にトラクターをかけ現状復帰。

2008年１月７日（月）　調査14日目。第14トレンチを北側に拡張。７号遺構を検出。

2008年１月８日（火）　調査15日目。第14トレンチの写真撮影。墓道の掘削。

2008年１月９日（水）　調査16日目。第14トレンチの墓道主軸セクション図作成（K-Lライン）。同トレンチ拡張部北壁セクション図作成。文化庁記念物課・清野孝之調査官が現場を視察。

2008年１月11日（金）　調査17日目。第14トレンチ南壁および拡張部北壁のセクション図，同トレンチ拡張部の平面図作成。

2008年１月15日（月）　調査18日目。第14トレンチの埋め戻し。

挿図写真５　第13トレンチ埋め戻し風景

挿図写真６　第14トレンチ埋め戻し風景

第５次調査

調査面積にして4.4㎡を開放している。発掘調査は2008年年10月９日～10月17日までの間，実働３日間をかけて行った。

2008年10月９日（木）晴れ　調査初日。機材搬入。15トレンチの設定・掘削。ローム上面で周溝外提部の立ち上がりを確認。周溝検出状況およびトレンチセクション写真撮影。

2008年10月14日（火）曇り　調査２日目。15トレンチのセクション図・平面図を作成。

挿図写真７　第15トレンチ調査風景

2008年10月16日（木）水戸市史跡等整備検討専門委員（吉田古墳担当）平成20年度第２回会議開催。

2008年10月17日（金）晴れ　調査３日目。15トレンチの埋め戻し及び第１号墳の草刈り。機材撤収。

第３節　基本層序

第４・５次調査における基本層序は，第２・３次調査において確認した基本層序と同一基準で記録した。Ⅰ～Ⅳ層に大別され，各層はさらに細分される。Ⅰ～Ⅳ層の大別については第２次調査と同じであるが，細分した層については，Ⅰｅ層，Ⅰｆ層，Ⅱb-2層，Ⅲｃ層，Ⅲｄ層が第４次調査によって，Ⅰｇ層，Ⅰｈ層が第５次調査によって新たに追加された層位である。

したがって下記に示した層序は第２～５次調査の統一層序として理解頂きたい。

Ⅰ層　現代の盛土・攪乱。いわゆる表土層。Ⅰａ層～Ⅰｄ層に細分される。

Ⅰａ層　砕石層。

Ⅰｂ層　黒褐色土層（10YR2/2）。ローム粒子（φ～５㎜）中量，炭化物微量含む。締まりやや強，粘性やや弱。

Ⅰｃ層　黒褐色土層（10YR3/2）。ローム粒子（φ～２㎜）少量含む。締まり・粘性やや弱。耕作土。

Ⅰc-2層　黒褐色土層（10YR3/1）。ローム粒子（φ～２㎜）微量含む。締まり・粘性やや弱。耕作土。篠の根が著しく入る。Ⅰｃ層のバリエーションと判断される。

Ⅰｄ層　黒色土層（10YR2/1）。ローム粒子（φ～１㎜）少量含む。締まり・粘性やや弱。耕作土。

Ⅰｅ層　褐色土層(10YR4/6)。ローム粒子(φ～１㎜)多量含む。暗褐色・黒褐色土多量。礫(φ～50㎜)中量含む。締まり・粘性あり。第１次調査後の整地層。

Ⅰｆ層　黒褐色土層（10YR3/1）。ローム粒子（φ～１㎜）微量含む。焼土・炭化物微量，礫（φ～１㎜）微量含む。ややボソボソ気味。締まり強，粘性やや弱。第１次調査時の旧表土。

Ⅰｇ層　黒褐色土層(10YR2/2)。ローム粒子(φ～２㎜)中量,炭化物･焼土中量含む。礫(φ～20㎜)中量含む。締まり強，粘性やや弱。墳丘北側部分の現代整地層。

Ⅰｈ層　黒褐色土層（10YR2/3)。ローム粒子（φ～１㎜）少量含む。炭化物少量・焼土微量含む。締まりやや強。粘性弱。墳丘北側部分の現代整地層。

Ⅱ層　近代か。Ⅱａ層～Ⅱｃ層に細分される。

Ⅱａ層　黒褐色土層（10YR2/2)。ロームブロック（φ 10㎜）少量，ローム粒子（φ～３㎜）やや多く含む。締まり・粘性やや弱。

Ⅱｂ層　黒褐色土層（10YR2/2)。ローム粒子（φ～５㎜）少量含む。締まり・粘性やや弱。

Ⅱｂ-2 層　黒褐色土層（10YR3/2)。ローム粒子（φ～１㎜）微量含む。締まり・粘性やや弱。

Ⅱｃ層　黒褐色土層（10YR2/2)。ローム粒子（φ～１㎜）少量含む。締まりあり，粘性やや弱。

Ⅲ層　近代以前。Ⅲａ層～Ⅲｂ層に細分される。

Ⅲａ層　にぶい黄褐色土層（10YR4/3)。ローム粒子（φ～１㎜）多量含む。しまりあり。粘性やや強。いずれも周溝の内側に堆積しており，一部において周溝内に入り込んでいる部分も見受けられる（第９トレンチ）ことから，墳丘の裾が崩れた可能性も考えられる。

Ⅲｂ層　黒褐色土層（10YR2/3)。ロームブロック（φ10～30㎜)，ローム粒子(φ～5㎜)多量含む。締まり・粘性あり。

Ⅲｃ層　黒褐色土層（10YR2/2)。ローム粒子（φ～１㎜）中量含む。締まり・粘性やや弱。

Ⅲｄ層　黒褐色土層（10YR2/2)。ローム粒子（φ～１㎜）中量含む。黄白色砂粒･炭化物少量含む。締まりあり，粘性やや弱。

Ⅳ層　関東ローム層（地山)。

第４節　発見された遺構

第４・５次調査で調査した遺構は，第１号墳に伴う周溝と，近世以降の遺構２基である。本整備事業では，古墳に関する遺構以外は「１号遺構，２号遺構，…」と通しの遺構番号を付しており，これまで６号遺構まで調査がなされている。したがって今次調査では７号～８号遺構までの遺構番号を付けた。

以下，各トレンチごとに確認された周溝について所見を述べた後，その他の時代の遺構（第７～８号遺構）についての報告を記す。

第１項　第13トレンチ検出の周溝（第７図）

位置・重複関係等　周溝は墳頂から約16.7ｍの位置（上面が削平され墳裾・外提が明確に押さえられないため，石室奥壁～周溝下端の距離を示す。以下同じ）で検出された。確認面はローム層上面である。立木を保護するため一部未掘削部分がある。

形態　検出規模は幅7.0ｍ～5.6ｍ，確認面からの深さは140㎝を測る。これまで確認された周溝の中では最も深い。墳裾部のプランは直線的に伸びていることが確認された。Ｎ－26°－Ｗの傾きを有する。

外提部のプランは周溝サブトレンチ南側の壁面付近を境にわずかに屈曲することが確認された。屈曲点北側がＮ－25°－Ｗと，墳裾部の傾きとほぼ平行なのに対し，南側はＮ－７°－Ｗの傾きを有する。屈曲角は291°である。

もう少し北側にトレンチを拡張すれば周溝プランも明瞭に把握できたことと思われるが，今次調査ではこれが限界であった。したがって外堤部の屈曲が“稜角”と呼べるものなのかどうかの判断は今後の調査に委ねたい。

覆土　サブトレンチを設定しセクション図を作成した（C-Dライン）。

第１号墳周溝の土層については，第２次調査以降統一の土層注記番号を付している（『吉田古墳Ⅰ』『同』Ⅱ参照）。今次調査における周溝の土層は以下の通りである。第２ｃ層と第14～18 層が今次調査で新たに追加された層位である。

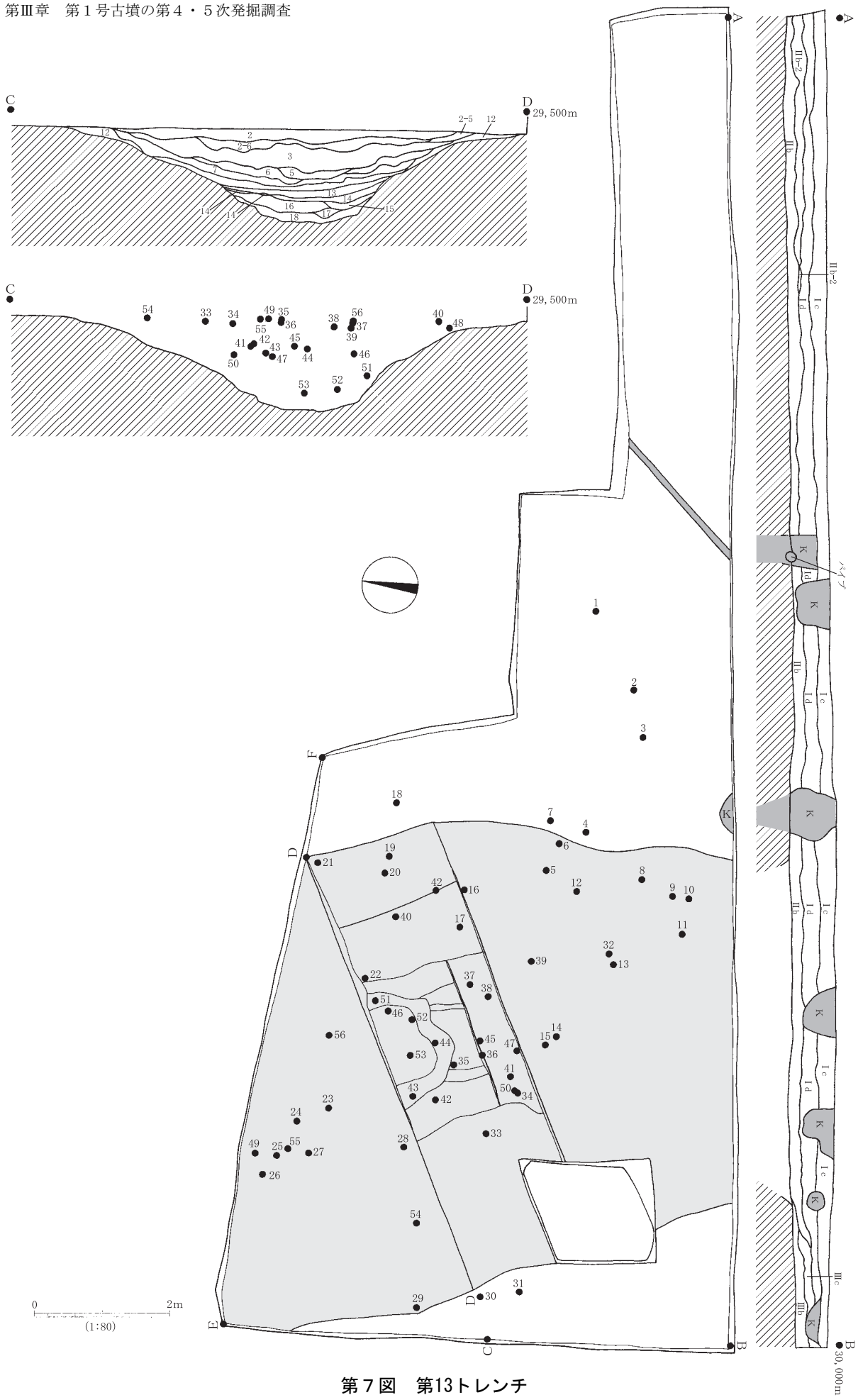
【第１号墳周溝統一土層注記】

第１層　黒褐色土層（10YR2/2）。ローム粒子（φ～２㎜）中量含む。締まりあり。粘性やや弱。キメ粗。草木の根が腐ったものか。

第２層　黒褐色土層（10YR2/2）。ローム粒子（φ～１㎜）微量含む。締まり・粘性あり。キメ密。

第２ｂ層　黒褐色土層（10YR3/2）。ローム粒子（φ～１㎜）微量含む。締まり・粘性あり。キメやや密。２層のバリエーションか。

第２ｃ層　黒褐色土層（10YR2/2）。ローム粒子（φ～１㎜）やや多量含む。締まりあり。粘性やや弱。



第７図　第13トレンチ

キメやや密。２層のバリエーションか。

第３層　黒褐色土層(10YR2/2)。ローム粒子(φ～２㎜)少量含む。締まりやや強。粘性やや弱。キメ粗。草木の根が腐ったものか。

第４層　黒色土層(10YR2/1)。ローム粒子(φ～３㎜)少量含む。締まり・粘性あり。キメやや密。

第５層　黒色土層(10YR2/1)。ローム粒子(φ～１㎜)微量含む。締まり・粘性やや弱。キメやや密。

第６層　黒褐色土層(10YR2/3)。ローム粒子(φ～２㎜)中量含む。締まり強。粘性あり。キメ密。硬化層。

第７層　黒褐色土層(7.5YR3/1)。ローム粒子(φ～１㎜)微量含む。締まり・粘性あり。キメやや密。

第８層　黒褐色土層(10YR3/2)。ローム粒子(φ～２㎜)少量含む。締まり・粘性やや弱。キメ密。

第９層　黒褐色土層(10YR2/3)。ローム粒子(φ～２㎜)やや多く含む。締まりあり。粘性やや弱。キメ密。

第10層　黒褐色土層(10YR3/2)。ローム粒子(φ～２㎜)多量含む。締まりやや強。粘性やや弱。キメ密。

第11層　黒褐色土層(10YR3/2)。ローム粒子(φ～３㎜)やや多く含む。締まりやや強。粘性やや弱。キメ密。

第12層　黒褐色土層(10YR3/2)。ロームブロック(φ10㎜)少量,ローム粒子(φ～３㎜)多量含む。締まり・粘性あり。キメ密。

第13層　黒褐色土層(10YR2/3)。ローム粒子(φ～２㎜)多量含む。締まり強・粘性やや弱。キメ密。貼床のように底面に堆積する。

第14層　黒褐色土層(10YR2/3)。ローム粒(φ～2㎜)多量含む。締まり強。粘性やや弱。キメ密。

第15層　黒褐色土層 (10YR2/3) とローム粒(φ～2㎜)の混合層。締まりあり。粘性やや弱。キメやや密。

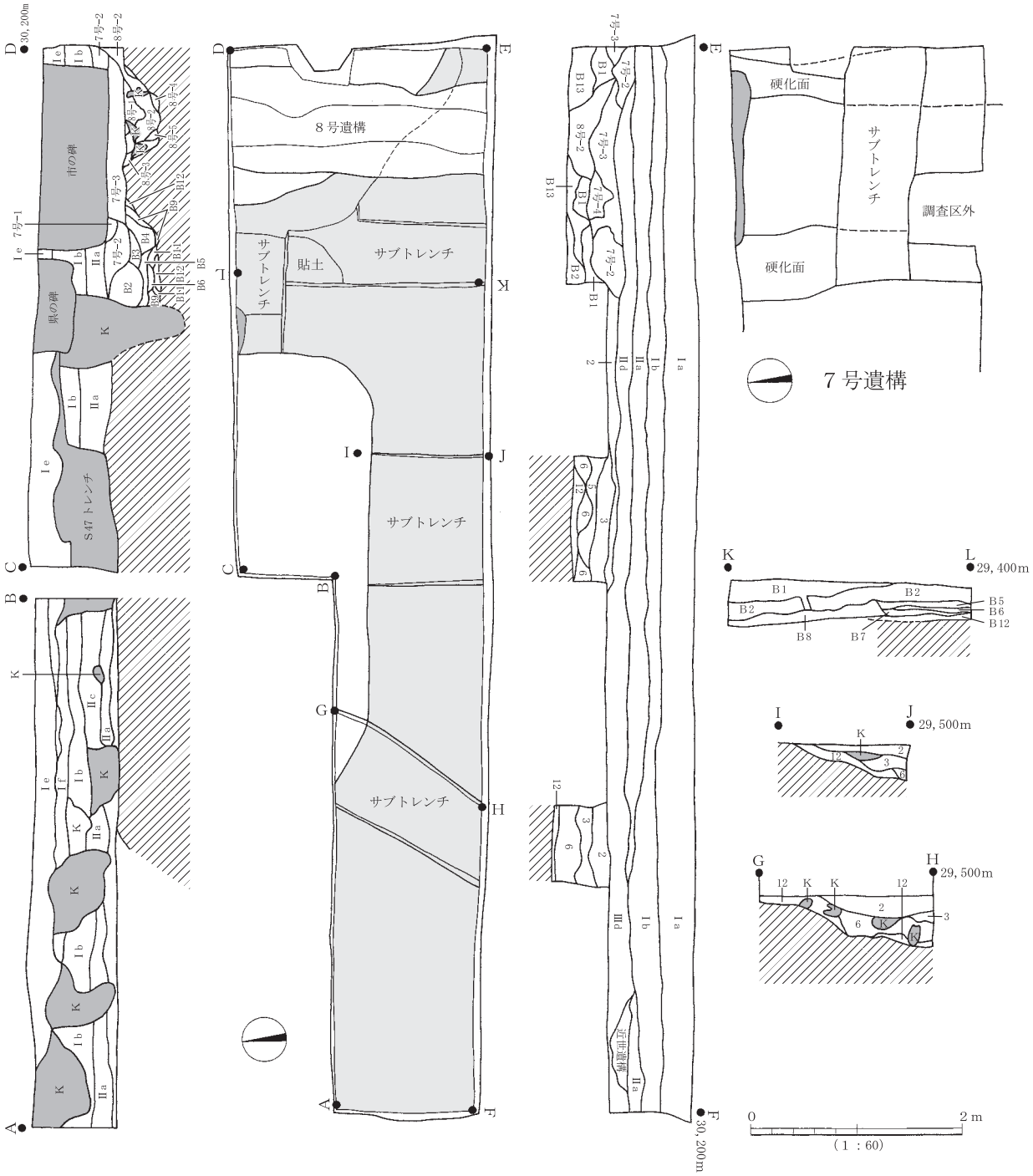
第16層　黒褐色土層(10YR2/2)。ローム粒(φ～2㎜)多量含む。締まり強。粘性やや弱。キメ密。

第17層　黒褐色土層(10YR2/3)。ローム粒(φ～1㎜)多量含む。締まり・粘性あり。キメやや密。

第18層　黄褐色土層(10YR5/8)とローム粒(鹿沼ローム,φ～80㎜)の混合層。締まり・粘性あり。キメやや粗。

セクション図を参照すると，墳裾側および外提側双方からの流入土により埋没していることが窺える。埋没過程は第２次・第３次調査とおおむね同様である。既知のデータを加味しつつ埋没過程を復元すると，

①第13～18層（ローム粒子を多量に含み,13･14 層で貼床状に敲き締める）→②第 11 層･第 12 層（ローム粒子を多量に含む）→③第７層（キメが細かい）→④第６層（硬化層）→⑤第３層（キメが粗くボソボソ）→⑥第２層（キメが細かい）→⑦第１層（キメが粗くボソボソ）


8号遺構
サブトレンチ
貼土
硬化面
調査区外
7号遺構
市の碑
県の碑
S47トレンチ
近世遺構
30, 200m
29, 400m
29, 500m
0
2 m
(1 : 60)

第８図　第14トレンチ

という，①→⑦段階の過程が窺える。今次調査においても第１号墳周溝の埋没過程が斉一的であったことを裏付ける所見が得られた。

さて本トレンチ調査で得られた埋没土の新知見としては，①段階の構築土，具体的には第13層～第18層の所見である。前回調査では第11トレンチ周溝の最下層で硬化した第13層が初めて発見され，筆者は報文中において「第13層は貼床のように締め固めており，人為堆積であることは間違いない。第８トレンチ・第９トレンチでは第13層は認められておらず，限定的な堆積と理解されよう。確認面からの深さが第８・９トレンチは70～80㎝であるのに対し，第11トレンチは90～100㎝とやや深い。このレベル差を調整するための造作であろうか」と述べている（『吉田古墳Ⅱ』）。

基本的には本トレンチにおける①段階の所見も前回と同様の性格を有するものであろうが，第11トレンチでは第13層のみで構築されていたものが，第13トレンチでは第13～第18層により構築されている点が異なる。必ずしも全層が硬化しているわけではなく，第15・17・18層など下層のほうが締まりが緩い。版築のように土質が異なる土を互層にしているわけでもないので，上部に重量のある構築物を乗せるための版築土であったとも考えにくい。

それにしても①段階の工程は既調査の周溝覆土の中でも限定的である。これまで確認されたのは第11トレンチ・13トレンチと第14トレンチのみで，周溝が屈曲するポイントに位置することが多い。東京都多摩市稲荷塚古墳では稜角部の周溝底部が一段低く掘り込まれていたといい（多摩市教育委員会1991），稜角部に何らかの意識が働きながら，古墳が構築されたようである。第１号墳における①段階の所作も，かかる意図があったのであろうか。

遺物　周溝からの出土遺物は原則としてすべて全点ドットによる記録をとっている。本トレンチ周溝からは71点の遺物が出土した（うち69点がドット上げ資料，第３表）。時代別の内訳は縄文時代が６点，弥生時代が９点，古墳時代が７点，奈良･平安時代が３点，中世が１点，近世が43点，近現代が２点，年代不明が30点で，近世が最も多い。ただし近世遺物はいずれも上層からの出土であり，セクション図の乱れもほとんどないことから，根攪乱等による混入であることは疑いない。

時期　前述のように①→⑦段階の堆積が認められたことから，これまで確認した周溝と同様の埋没過程を辿ったと判断される。第７トレンチ３層から８世紀第４四半期～９世紀第１四半期の須恵器坏が出土していることから（『吉田古墳Ⅰ』62頁参照），本トレンチも当該時期に埋没した可能性が高い。

第２項　第14トレンチ検出の周溝と墓道（第８図）

位置・重複関係等　本トレンチでは周溝とともに墓道を確認している。周溝墳裾部は墳頂から約13ｍの位置で検出され，墓道は石室開口部の延長線上で周溝に取り付くように確認された。確認面はローム上面である。トレンチ上層は近世以降の活発な土地利用の痕跡が見受けられ，とくに墓道と周溝が交わる最も注目される部分の遺存状況は限定的である。近世の道路上遺構である第７号・第８号遺構に切られる。

形態　トレンチ設定がきわめて限定的であったため，周溝の検出規模は詳らかではない。周溝底部は現市道の直下であり，本トレンチでは墳裾側の周溝の立ち上がり部分を確認したに過ぎないため，確

認面からの深さも不明である。

平面プランでは，石室開口部の延長戦上で幅140㎝の墓道が確認され，これにより墓道の総延長がはじめて判明した。石室梱石から墓道突端までの長さは約10ｍ，石室奥壁からは約13ｍを測る。墓道の傾きはＮ－５°－Ｗである。

周溝はこの墓道に取り付いており，墓道東側は近世遺構の切り合いがあるためプランが明瞭ではないが,西側は攪乱がなく遺存状況は良好である。これをみると周溝は直線的であることが明かであり，G-Hライン付近で屈曲することが判明した。屈曲点は緩やかではあるが,「く」の字状を描いており，稜角と判断できる可能性がある。繰り返すようにトレンチが限定的であるため，この屈曲点の評価については拙速を避け，今後の調査の進展を待って判断したい。

屈曲点の角度はおよそ150°,その東側はＮ－85°－W,西側はおよそＮ－55°－Wの傾きを有する。

覆土　サブトレンチは周溝屈曲部に１箇所（G-Hライン),第１トレンチの延長線上の周溝に１箇所（I-Jライン)，墓道に１箇所（K-Lライン）の計３箇所を設定した。

周溝覆土については第13トレンチで述べた以上の所見は得られず，これまでと同様の堆積状況を窺わせるものであった。これは逆に言えば，墓道の取りつく墳丘南側の周溝についても，大規模かつ広範囲な造作が行われていないことを想記させるものであろう（無論，小規模な造作程度は実施されているであろうが…)。

墓道の確認については，狭小な調査区を余儀なくされたため，調査方法は困難を極めた。結論から言えば，今次調査においてむやみに掘削するのは，中・長期的な調査方針からみてマイナスであると判断した。したがって今次調査では拙速な掘削を避け，後日追加調査を実施する時のヒントとなる程度の情報さえ提示できればよい，という立場に立って調査を実施した。

原則として掘削深度は墓道底面とみられる貼りローム層までを限度とし，調査区北側の一部についてはローム層までの掘削を限定的に行った。土層断面はK-Lラインで墓道の主軸方向で南北方向の半截を行った。また調査区の北壁面セクションであるC-Dラインおよび，南壁面セクションであるE-Fラインで，墓道に直交する東在方向の土層堆積を確認している。土層注記は以下の通り。

【第１号墳墓道統一土層注記】※第８図では「Ｂ１（墓道第１層)，Ｂ２（墓道第２層）…」などと表記。

第１層　黒色土層(10YR2/1)。ローム粒子(φ～１㎜)中量含む。凝灰質泥岩少量含む。締まりやや強。粘性やや弱。

第２層　黒褐色土層(10YR2/2)。ローム粒子(φ～１㎜)微量含む。凝灰質泥岩を密に含む。締まりやや強。粘性あり。

第３層　黒褐色土層(10YR2/3)。ローム粒子(φ～１㎜)微量含む。凝灰質泥岩を密に含む。締まりあり。粘性やや弱。

第４層　黒褐色土層(10YR3/2)。ローム粒子(φ～１㎜)多量含む。凝灰質泥岩やや多量含む。締まりあり。粘性やや弱。

第５層　黒褐色土層(10YR2/3)。ローム粒子(φ～１㎜)微量含む。白色粘土微量含む。締まり・粘性あり。

第６層　黒褐色土層(10YR2/3)。ローム粒子(φ～１㎜)少量含む。白色粘土やや多量含む。締まりやや強。粘性やや弱。

第７層　黒褐色土層(10YR3/2)。ローム粒子(φ～１㎜)中量含む。白色粘土多量含む。締まりあり。粘性やや弱。

第８層　暗褐色土層(10YR3/3)。ローム粒子(φ～３㎜)密に含む。締まりやや強。粘性やや弱。

第９層　暗褐色土層(10YR3/3)。ローム粒子(φ～１㎜)密に含む。締まり・粘性やや弱。

第10層　黒褐色土層(10YR2/3)。ローム粒子(φ～２㎜)中量含む。締まり弱。粘性やや弱。

第11層　黒褐色土層(10YR2/2)。ローム粒子(φ～１㎜)微量含む。白色粘土を密に含む。締まり・粘性あり。

第12層　淡黄色粘土層(10YR3/2)。黒褐色土中量含む。締まりやや強。粘性強。

第13層　黒色土層(10YR2/1)。ローム粒子(φ～１㎜)少量含む。凝灰岩質泥岩微量含む。締まりあり。粘性やや弱。

遺物　第14トレンチの周溝と墓道には４本のサブトレンチを設定した。特に墓道からは墓前祭祀に絡む遺物の検出を期待していたものの，残念ながら周溝・墓道ともに覆土からの遺物は皆無であった。ちなみに第１次調査においても墓道を掘削しているが，遺物は皆無であったと報告されている（『吉田古墳Ⅰ』39頁参照）。

第14トレンチ出土の遺物は108点であるが，大半は近現代層からの出土である。すべて近世以降の遺物であり，古墳時代に遡る資料も認められなかった。

時期　周溝については，２層・３層・６層・12層（第１号墳周溝統一土層注記）が，これまでに確認されている周溝の埋没過程と同様の土層堆積状況であることから，８世紀第４四半期～９世紀第１四半期に埋没した可能性が高い。

また，第14トレンチではじめて確認された事柄として，墓道の土層堆積がある。とくにK-Lラインで確認されたセクション図で注目されるのは，５層・６層・７層（第１号墳墓道統一土層注記）の存在である。これらの層は８層を掘り込んでいることから，墓道が周溝のように一気に埋まらず，幾度かの変遷を経て埋没したことが明かとなった。管見の限りにおいて，墓道の埋没過程は，

①粘土（12層）を貼る→②暗褐色土（８層）による盛土→③盛土面からの掘込・埋没（５～７層）→④黒色土（１層）・黒褐色土（２層）による盛土

という流れが窺える。出土遺物がなく，また周溝覆土との関連性も不明なため，実年代による比定は難しい。後日の課題としたい。

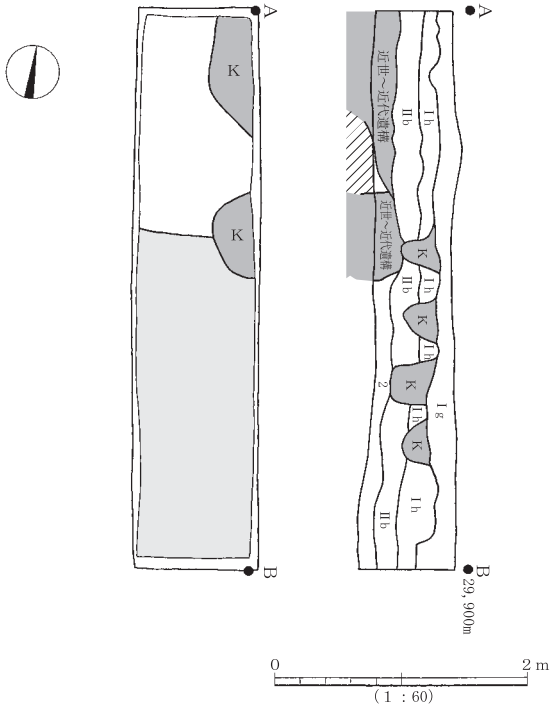
第３項　第15トレンチ検出の周溝（第９図）

位置・重複関係等　周溝は墳頂から約16.5ｍの位置で検出された。確認面はローム層上面である。攪乱等はなく，遺存状況は良好である。

形態　前述の如く，本トレンチは所与の条件下での設定を余儀なくされたため,周溝の一部を確認・掘削することとなった。検出規模は幅4.1ｍであるが，これは周溝の一部の値であり，外提部は調査区外に延びている。

確認面からの深さは70㎝を測る。平面プランは直線的ではあるが,幅１ｍのトレンチなので直線・曲線の区別は難しい。墳裾部立ち上がりはＮ－3°－Ｗの傾きを有する。

覆土　11トレンチと同様，①→⑦の埋没過程が窺える。ここでも13層が確認されていることは留意されよう。



第９図　第５トレンチ

遺物　周溝覆土からは出土していない。

時期　①→⑦段階の堆積が認められたことから，これまで確認した周溝と同様の埋没過程を辿ったと判断される。第７トレンチ３層から８世紀第４四半期～９世紀第１四半期の須恵器坏が出土していることから（『吉田古墳Ⅰ』62頁参照），本トレンチも当該時期に埋没した可能性が高い。

第４項　その他の遺構

今次調査では，第１号墳の周溝と墓道以外にも，２基の遺構を調査している。いずれも近世以降の所産であり，第１号墳の造営には直接関わりのない遺構である。しかし今尾文昭氏らが指摘するように，古墳が当初の造営意図を離れて，後世に舎利信仰の聖地となったり，納骨堂や仏教教化の道場として再利用されるなど（今尾2000），古墳の存在が地域における土地利用のありように一定の影響を及ぼす可能性は考慮していく必要があろう。

遺構番号は『吉田古墳Ⅱ』において第１号遺構～第６号遺構まで報告されているため，本報告で扱う２基の遺構名は，第７号遺構，第８号遺構とする。

第７号遺構（第７図）

位置・重複関係等　第13トレンチで確認された。確認面はⅡ層上面である。第１号墳墓道および第８号遺構を切る。

形態　主軸方位をＮ－5°－Ｅに取る道路状遺構。検出範囲は，長軸240㎝×短軸240㎝，確認面からの深さは40㎝を測る。断面形は浅い皿状を呈し，両肩部分が敲き締められ硬化面となっている。

覆土　４層に分層される。両肩部分を意図的に硬化させており（２層），道路普請に伴う人為堆積であることは明白である。

第１層　黒褐色土層（5YR3/1）。ローム粒（φ～５㎜）微量含む。粘性弱，締まりあり。

第２層　黒褐色土層（7.5YR2/2）。ローム粒（φ～５㎜）多量含む。粘性弱，締まり強。

第３層　黒褐色土層（5YR2/1）。ローム粒（φ 2～20㎜）少量含む。粘性やや弱，締まりあり。

第４層　黒褐色土層（2.5YR2/1）。ローム粒（φ～１㎜）微量含む。粘性あり，締まりあり。

遺物　形象埴輪片，土師器片，肥前産薄手Ｕ字高台皿，肥前産呉器手腕，七面焼，火鉢など12点が出土している。

時期　確認面・出土遺物から近世。七面焼が出土していることから，19世紀前半頃の構築か。

遺構の性格　道路。

第８号遺構（第７図）

位置・重複関係等　第13トレンチで確認された。確認面はローム層上面であるが，上部は第７号遺構により削平されていたため,本来の遺構確認面はⅡ層上面である可能性が高い。第１号墳墓道を切り，第７号遺構に切られる。

形態　主軸方位をＮ－5°－Ｅに取る溝状遺構。検出範囲は，長軸240㎝×短軸100㎝，確認面からの深さは26㎝を測る。断面形は逆台形を呈する。

覆土　５層に分層される。両肩部分を意図的に硬化させており（２層），道路普請に伴う人為堆積であることは明白である。

第１層　黒褐色土層（7.5YR2/2）。ローム粒（φ～５㎜）微量含む。粘性やや弱，締まりあり。

第２層　黒褐色土層（7.5YR2/2）。ローム粒（φ１～５㎜）中量含む。粘性やや弱，締まりあり。

第３層　黒褐色土層（7.5YR3/2）。ローム粒（φ～５㎜）少量含む。粘性弱，締まりあり。

第４層　黒褐色土層（7.5YR3/2）。ローム粒（φ２～５㎜）中量含む。粘性弱，締まりあり。

第５層　黒褐色土層（7.5YR3/2）。ローム粒（φ２～５㎜）微量含む。粘性弱，締まりあり。

遺物　近世の土器片が４点出土するのみである。

時期　確認面・出土遺物から近世。実年代の決め手となる資料は得られなかったが，前後関係からみて18世紀後半～19世紀前半頃の構築の可能性がある。

遺構の性格　区画溝。第７号遺構と第８号遺構は同軸であり,年代差もさほど離れていないことから，両遺構は明かに関連性が認められる。第８号遺構が小規模な区画溝として近世後半に機能していたものが，道路（第７号遺構）として付け替えられたものとみられる。両遺構は当然，第１号墳墳丘を意識しながら取り付けられたものとみられ，両遺構が墳丘に向かっていかなる軸線を取るのかが，近世後半における古墳の意識のあり方を窺う決め手となるであろう。

（関口）

第５節　出土した遺物

（第10図～第11図，第２表・第３表，写真図版８）

本節では，第４・５次調査において出土した遺物について通覧する。これらの遺物の内訳については,『吉田古墳Ⅰ』『同Ⅱ』で報告してきたカウントに準拠し，第３表の出土遺物一覧表にて明記した。同表における出土遺物のカウントの目的と方法については,『吉田古墳Ⅰ』59頁を参照されたい。

第１項　古墳時代以前の遺物

先土器時代の遺物　本調査は史跡整備に伴う調査であるため，地山である関東ロームは一切掘削していない。従って，当該期の土地利用の痕跡は確認できなかった。また，表土・攪乱・周溝等からも，当該期の遺物は出土していない。

縄文時代の遺物　第13トレンチの周溝覆土から６点の縄文土器片（全て破片）が出土している。うち３点を図示した（第10図１～３）。いずれも中期後葉の加曽利Ｅ式の深鉢形土器である。１はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部直下の破片で，隆帯により渦巻き文を表現している。２と３は胴部破片で地文に単節LR縄文を縦方向に回転させている。３はさらにその上に隆帯を貼り付け，隆帯上にも縄文を回転させている。

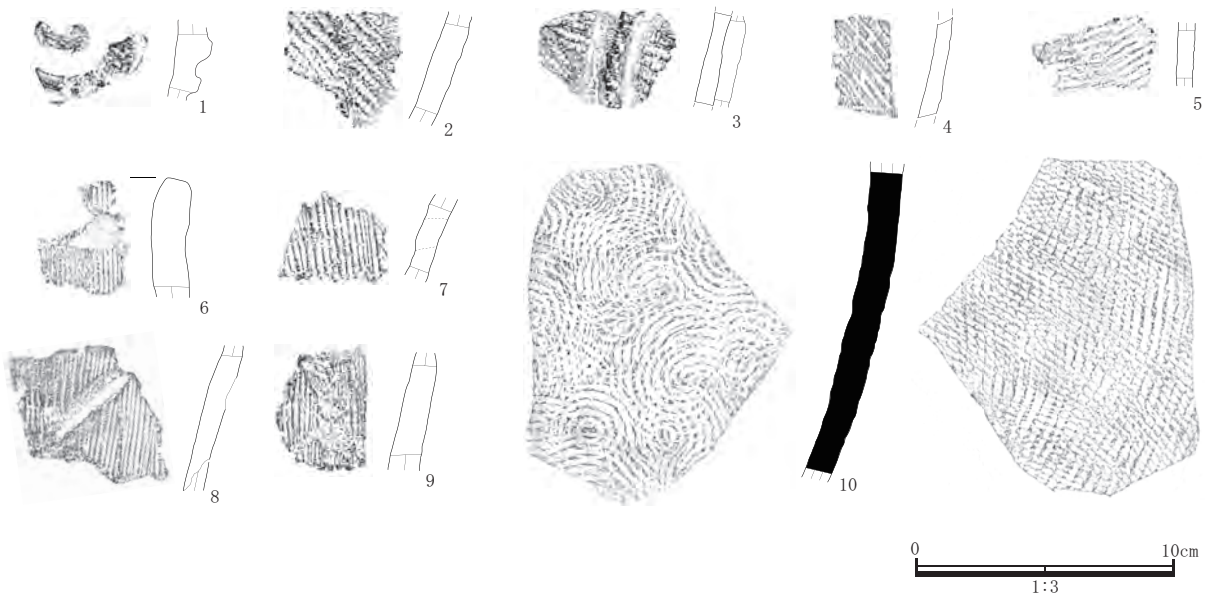
弥生時代の遺物　第13トレンチの周溝覆土から９点の弥生土器片（全て破片）が出土している。うち２点を図示した（第10図４・５）。いずれもＬをＺ巻きした原体（軸縄不明）で施文した胴部破片で，５はさらにＲをＳ巻きした原体（軸縄）不明で羽状縄文を構成している。

既往の調査でも第８・９・11トレンチから弥生時代後期の付加条縄文第１種が施された胴部破片や十王台式とみられる壺形土器の頸部破片と胴部破片が出土しており，墳丘東側に集中して出土する傾向が顕著である。吉田古墳の東方に位置する薬王院東遺跡では弥生時代後期十王台式期の集落が検出されており，この集落との関連性は当然疑うべきであろう。薬王院東遺跡の範囲は未だ確定しておらず，範囲が広がる可能性は十分ある。同遺跡を含む土地利用の展開については，今後も注視すべき事柄と言えよう。

第２項　古墳時代～奈良・平安時代の遺物

古墳時代の遺物　今次調査では11点の遺物が出土している。内訳は第13トレンチの周溝覆土から埴輪片が５点，須恵器片が２点，第14トレンチの包含層Ⅱ層中から埴輪片が１点，土師器片が２点，７号遺構から埴輪片が１点である。うち５点を図示した（第10図６～10）。６～９は古墳時代の円筒埴輪片である。６は口縁部，７～９は胴部破片であり，いずれも外面に縦方向の刷毛目がみられる。いずれも凸帯部を残していない。いずれも小破片であり年代比定は困難であるが，土浦市立博物館の塩谷修氏の御教示によれば，第３次調査出土の埴輪群と胎土や刷毛目等の特徴が類似しており，６世紀前半頃に位置づけられる可能性があるという。

７は，胎土に雲母を含まないことから，茨城町小幡北山埴輪窯かひたちなか市馬渡埴輪窯の製品で



第10図　第４次調査出土遺物（１）

ある可能性が高い。他方，６・８・９は胎土に白雲母を多量に含んでいる点で異なっている。

白雲母を胎土に多量に含む特徴は，吉田古墳の近隣に営まれているひたちなか市馬渡埴輪製作跡や茨城町小幡北山埴輪窯の埴輪には見られないもので，常陸太田市元太田山埴輪窯の埴輪や県南地域の筑波山周辺の埴輪にみられる特徴とされる。吉田古墳においてかかる資料が出土していることについては，『吉田古墳Ⅱ』ではじめて確認され，報文では胎土・内面調整ともに筑波山周辺の埴輪製作跡から供給されていた可能性が高いことを指摘している。

奈良・平安時代の遺物　第13トレンチ周溝覆土から須恵器片３点が出土している。いずれも小片であり，図示はしていない。うち１点は木葉下窯産である。（川口・関口）

第３項　中世～近・現代の遺物

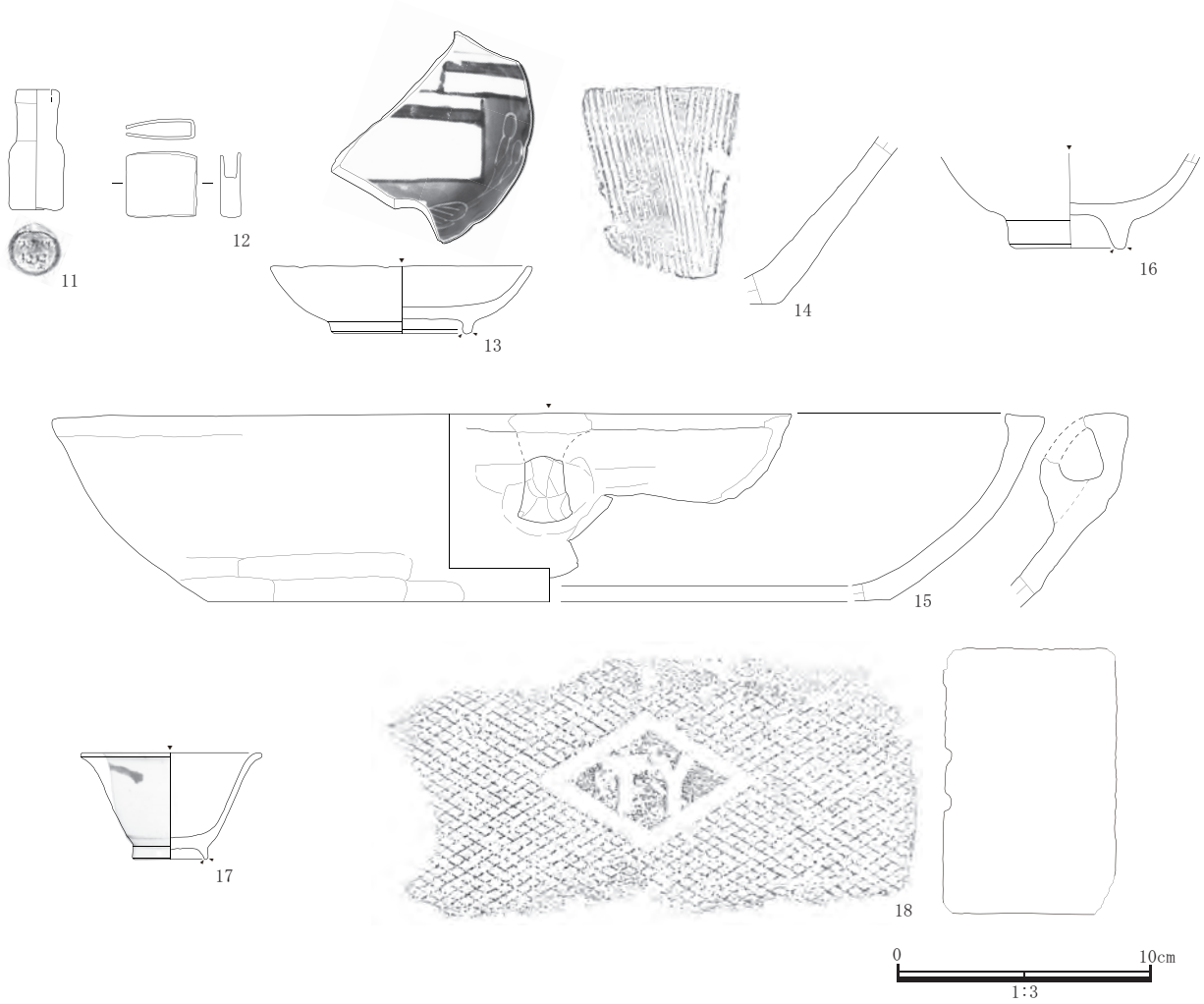
中世の遺物　第13トレンチ周溝最上層からカワラケ片が１点出土している。小片であり図示はしていない。既往の調査でも内耳土鍋が１点出土するに止まっており，中世における土地利用の希薄さを窺わせる。

近世の遺物　個体１点，破片130点の計131点が出土している。うち６点を図示した（第11図12～17）。磁器は肥前産，瀬戸・美濃産，在地産いずれもが認められ，総じて18世紀後半以降の資料が多い。陶器では16をはじめ，呉器手腕の出土が３点あり，出土率としてはやや顕著である。また図示はしなかったが，七面焼の破片も１点出土している。金属製品で注目される資料としては12の鏃がある。銅無垢の装飾性のない素朴な資料である。

近世遺物は今回の出土総数の約６割を占め，城下町近郊農村として土地利用が活発化していく様相が，遺物の出土量からも顕著に窺えよう。

近代～現代の遺物　個体１点，破片19点の計20点が出土している。うち２点を図示した（第11図11・

18)。11は統制番号を付した硝子瓶である。第２次調査においても国民食器が出土しており（『吉田古墳Ⅰ』），また市内遺跡の試掘・確認調査などでも相当数確認されているところである。これらの統制番号を付した資料群は，軍都としての近～現代の水戸を象徴する遺物として評価され，今後も注目して資料化に努めていく必要があろう。18は耐火煉瓦である。「TY」の刻印があり，生産地を示したものであろうが，具体的な比定には至らなかった。（関口）



第11図　第４次調査出土遺物（２）

第２表　出土遺物観察表

（　）は復元値，［　］は残存値

図版番号	番号	出土地点	種別・器種	部位・残存値	法量（cm）			重量（g）	技法・文様・胎土・色調・焼成等	推定生産地	推定年代・時期	備考
					口径	底径	器高					
10	1	第13トレンチドットNo.31	縄文土器・深鉢	口縁部・破片	—	—	［1.0］	21	棒状工具による渦巻き文／胎土：細・白・透・多／色調内・外面：にぶい褐（7.5YR6/3）／焼成普通		加曽利E式	
	2	第13トレンチドットNo.52	縄文土器・深鉢	胴部・破片	—	—	［0.8］	26	単節LR縄文縦回転／胎土：細・白・透・多／色調内・外面：にぶい橙（7.5YR6/4）／焼成良好		加曽利E式	
	3	第13トレンチドットNo.48	縄文土器・深鉢	胴部・破片	—	—	［0.9］	32	単節LR縄文縦回転，粘土紐を貼り付けて隆帯を形成，隆帯上にも縄文を回転施文／胎土：細・白・透・多／色調内・外面：褐灰（10YR4/1）／焼成良好		加曽利E式	
	4	第13トレンチドットNo.21	弥生土器	胴部・破片	—	—	［0.6］	11	LをZ巻きした原体（軸縄不明）とRをS巻きした原体（軸縄不明）で羽状縄文を構成／胎土：細・白・透・多／色調内・外面：褐灰（10YR4/1）／焼成良好		弥生時代後期	
	5	第13トレンチドットNo.49	弥生土器	胴部・破片	—	—	［0.6］	12	LをZ巻きした原体（軸縄不明）で施文／胎土：細・白・透・多／色調内・外面：浅黄橙（10YR8/4），焼成良好		弥生時代後期	
	6	第13トレンチドットNo.40	埴輪・円筒埴輪	口縁部・破片	—	—	［1.2］	24	外面：縦方向のハケ目，内面：指ナデ／胎土：長石，石英，雲母多量含む／色調外面：橙（7.5YR6/6），内面：にぶい黄橙（10YR6/4），焼成良好	筑波山方面	古墳時代後期	
	7	第13トレンチドットNo.14	埴輪・円筒埴輪	頸部・破片	—	—	［0.9］	20	外面：縦方向のハケ目，内面：指ナデ／胎土：長石，石英含む／色調内・外面：にぶい黄橙（10YR7/3）／焼成良好		古墳時代後期	
	8	第13トレンチドットNo.33	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	［0.8］	40	外面：縦方向のハケ目，内面：指ナデ／胎土：長石，石英，雲母多量含む／色調外面：橙（7.5YR7/6），内面：にぶい黄橙（10YR6/4）／焼成良好	筑波山方面	古墳時代後期	
	9	第13トレンチドットNo.37	埴輪・円筒埴輪	胴部・破片	—	—	［1.1］	28	外面：縦方向のハケ目，内面：指ナデ／胎土：長石，石英，雲母多量含む／色調外面：にぶい橙（7.5YR7/4），内面：にぶい黄橙（10YR6/4）／焼成普通	筑波山方面	古墳時代後期	
	10	第13トレンチドットNo.42	須恵器・甕	胴部・破片	—	—	［1.2］	246	外面：格子叩き，内面：同心円文の当て具痕による青海波／胎土：長石・石英含む／色調内外面：灰（5Y5/1）／焼成良好		古墳時代後期	
11	11	第13トレンチ周溝上層	ガラス製品 薬瓶	完形	1.8	2.2	4.9	17	無色透明／気泡あり／コルク栓／底裏に「ス□□岐」（統制番号か）を陽刻	美濃	1941年～1945年	
	12	第13トレンチ周溝上層	銅製品・鏃（はばき）	完形	幅 2.8	高 2.8	厚 0.85	17	一枚鏃／銅無垢・緑青／呑込あり		近世	
	13	第14トレンチⅡ層	磁器・皿 輪花口銹皿	1/2以下	(10.6)	5.8	2.7	51	轆轤型打成形／染付／輪花，口銹，畳付無釉，見込み墨弾きで雲に塀文か	在地産か	19世紀～か	
	14	第14トレンチⅡ層	陶器・擂鉢 瀬戸・美濃X	体部～底部・破片	—	—	［1.3］	101	紐作り轆轤成形／底裏糸切痕／鉄釉施釉，櫛目は密	瀬戸・美濃	17世紀中葉～18世紀	
	15	第14トレンチⅡ層	土器 内耳土鍋	口縁部～底部・1/2以下	(40.0)	7.6	27.6	233	紐積み成形／体部外面横ナデ，内面横ハケ／内耳貼付残存1/胎土：長石含む／内外面煤付着，焼成普通	在地産	17世紀以降か	写真図版なし
	16	第14トレンチⅡ層＋7号遺構	陶器・碗 呉器手碗	体部～底部・1/2以下	—	4.7	［3.8］	83	轆轤成形／高台畳付を除き貫入の多い長石釉を全面施釉／胎土：肌色でやや軟質	肥前	1650年代～1710年代	
	17	第14トレンチ7号遺構	磁器・小坏	1/2以上	(7.3)	3.1	4.3	24	轆轤成形／畳付を除き白泥を全面塗土の上呉須で施文し施釉／口縁端反，畳付無釉，外面唐草文，高台脇二重圏線	在地産	19世紀～	
	18	表面採集	土製品・耐火煉瓦	ほぼ完形	10.7	21.9	6.9	2300	型押成形，表面及び裏面に格子目状の押圧／表面中央に菱形区画内「TY」刻印あり／胎土：礫・長石多量含み粗い／焼成良好		近代	

第３表　出土遺物一覧表

出土地点		出土遺物		縄文			弥生			古墳			奈・平			中世			近世			近現代			不明			総計
				破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	
13トレンチ	No.1	土器	土器片			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.2	土器	弥生土器片　後期後半			0	1		1			0			0			0			0			0			0	1
	No.3	土器	土器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.4	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.5	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.6	土師器	甕類			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.7	土器	土器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.8	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.9	磁器	コバルト染付碗			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
	No.10	土器	壺			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.11	土器	中カワラケ			0			0			0			0	1		1			0			0			0	1
	No.12	須恵器	蓋　木葉下産			0			0			0			0			0			0			0			0	0
	No.13	磁器	銅板絵付　花生か			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
	No.14	埴輪	円筒埴輪			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
	No.15	陶器	常滑　壺			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.16	磁器	肥前　器種不明			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.17	陶器	産地不明　急須蓋			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.18	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.19	礫				0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.20	土器	カワラケ片			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.21	土器	胴部　弥生後期			0	1		1			0			0			0			0			0			0	1
	No.22	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.23	埴輪	形象埴輪片か　雲母含む			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
	No.24	土器	瓦質土器片			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.25	土器	中カワラケ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.26	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.27	礫	未加工			0			0			0			0			0			0			0		1	1	1
	No.28	土器	弥生土器片			0	1		1			0			0			0			0			0			0	1
		土器	カワラケ片			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
		土器	土器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
		土器	土器片　瓦質			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.29	土器	カワラケ片			0			0			0			0			0	2		2			0			0	2
	No.30	磁器	肥前　皿			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.31	土器	深鉢　加曽利Ｅ式	1		1			0			0			0			0			0			0			0	1
	No.32	土器	弥生土器片　十王台式			0	1		1			0			0			0			0			0			0	1
		土器	丸火鉢			0			0			0			0			0	3		3			0			0	3
	No.33	埴輪	円筒埴輪　雲母含			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
	No.34	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.35	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.36	土器	カワラケ片			0			0			0			0			0	2		2			0			0	2
		土器	壺　瓦質			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
		土器	土器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.37	埴輪	円筒埴輪　雲母含			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
	No.38	陶器	肥前　刷毛目碗			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.39	須恵器	坏　木葉下産			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
	No.40	埴輪	円筒埴輪　雲母含			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
	No.41	土器	中カワラケ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.42	須恵器	甕　胴部			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
	No.43	礫				0			0			0			0			0			0			0		1	1	1
	No.44	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.45	土器	縄文土器片　後期以降	1		1			0			0			0			0			0			0			0	1
	No.46	土器	縄文土器片	1		1			0			0			0			0			0			0			0	1
	No.47	土器	弥生土器片			0	1		1			0			0			0			0			0			0	1
	No.48	土器	深鉢　加曽利Ｅ式	1		1			0			0			0			0			0			0			0	1
	No.49	土器	胴部　弥生後期			0	1		1			0			0			0			0			0			0	1
	No.50	土器	弥生土器片			0	1		1			0			0			0			0			0			0	1
	No.51	土器	土器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.52	土器	深鉢　加曽利Ｅ式	1		1			0			0			0			0			0			0			0	1
	No.53	土器	縄文土器片　加曽利Ｅ式	1		1			0			0			0			0			0			0			0	1
	No.54	須恵器	産地不明　瓶類			0			0			0	1		1			0			0			0			0	1
	No.55	土器	角火鉢　瓦質			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	No.56	土器	丸火鉢　瓦質			0			0			0			0			0	2		2			0			0	2
	No.57	土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	No.58	土師器	甕類			0			0			0	1		1			0			0			0			0	1
	No.59	土器	カワラケ片			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	周溝１層	土器	弥生土器片　中期以降			0	1		1			0			0			0			0			0			0	1
			カワラケ片			0			0			0			0			0	3		3			0			0	3
	周溝上層	磁器	瀬戸・美濃　碗			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			七面焼か　鉢			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			在地産　甕			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			瀬戸・美濃　器種不明			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1

出土地点		出土遺物		縄文			弥生			古墳			奈・平			中世			近世			近現代			不明			総計
				破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	
13トレンチ	周溝覆土	土器	弥生土器片			0	1		1			0			0			0			0			0			0	1
	表土	須恵器	坏　木葉下産			0			0			0	1		1			0			0			0			0	1
		磁器	肥前系　輪花口銹皿Ｃ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
		土器	中カワラケ			0			0			0			0			0	1		1			0	1		1	2
			カワラケ片			0			0			0			0			0	7		7			0	1		1	8
			破片（瓦質）			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
			破片			0			0			0			0			0			0			0	7		7	7
14トレンチ	№1	土器	瓦質土器片			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	表土	磁器	肥前　半球碗Ｃ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			瀬戸・美濃　端反碗Ｘ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			銅板絵付鉢			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
		陶器	肥前　刷毛目皿			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			在地産　擂鉢			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
		土器	土器片（瓦質）			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
	包含層Ⅰ・Ⅱ層	磁器	肥前　丸碗Ａ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			肥前　小丸碗			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			瀬戸・美濃　端反碗Ｃ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			在地産　碗			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			コバルト染付碗			0			0			0			0			0			0	3		3			0	3
			型紙絵付碗			0			0			0			0			0			0	2		2			0	2
			吹掛碗			0			0			0			0			0			0	2		2			0	2
			産地不明　変形型押文小皿			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			瀬戸・美濃　磁器片			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
		陶器	肥前　刷毛目碗			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			瀬戸・美濃　志野皿			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
		土器	カワラケ片			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			鍋			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			丸火鉢（瓦質）			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			鉢（瓦質）			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			土器片			0			0			0			0			0			0			0	3		3	3
			土器片（瓦質）			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
		硝子	瓶			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
	包含層Ⅱ層	埴輪	形象埴輪片か　雲母含む			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
		土師器	甕類			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
			土師器片			0			0	1		1			0			0			0			0	3		3	4
		磁器	肥前　厚手碗Ｘ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			肥前　半球碗Ｘ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			肥前　小碗			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			釉下色絵碗			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
		陶器	肥前　呉器手腕			0			0			0			0			0	2		2			0			0	2
			産地不明　灰釉碗			0			0			0			0			0	2		2			0			0	2
			産地不明　灰釉鉢			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
			産地不明　植木鉢			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
			産地不明　鉄釉壺			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
			産地不明　破片			0			0			0			0			0			0			0	2		2	2
		土器	中カワラケ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			小カワラケ			0			0			0			0			0	2		2			0			0	2
			カワラケ片			0			0			0			0			0	3		3			0			0	3
			鍋			0			0			0			0			0	43		43			0			0	43
			内耳鍋（瓦質）			0			0			0			0			0	3		3			0			0	3
			土器片			0			0			0			0			0			0			0	4		4	4
		硝子	化粧瓶か			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
		鉄製品	切釘２寸			0			0			0			0			0		1	1			0			0	1
15トレンチ	表土	陶器	瀬戸・美濃　長の碗			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			産地・器種不明			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
		土器	壺　瓦質			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
７号遺構		埴輪	形象埴輪片か			0			0	1		1			0			0			0			0			0	1
		土師器	土師器片			0			0			0			0			0			0			0	1		1	1
		磁器	肥前　厚手Ｕ字高台皿			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
		陶器	肥前　呉器手腕			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			七面焼か　鉢			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
		土器	丸火鉢			0			0			0			0			0	2		2			0			0	2
			鉢（瓦質）			0			0			0			0			0	2		2			0			0	2
			土器片			0			0			0			0			0	1		1			0	2		2	3
８号遺構		土器	鉢			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			土器片			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
			土器片（瓦質）			0			0			0			0			0	2		2			0			0	2
表採	13トレンチ付近	土器	中カワラケ			0			0			0			0			0	1		1			0			0	1
	4次調査時	土器	壺			0			0			0			0			0			0	1		1			0	1
		煉瓦	耐火煉瓦			0			0			0			0			0			0		1	1			0	1
総計				6	0	6	9	0	9	11	0	11	3	0	3	1	0	1	130	1	131	19	1	20	45	2	47	228

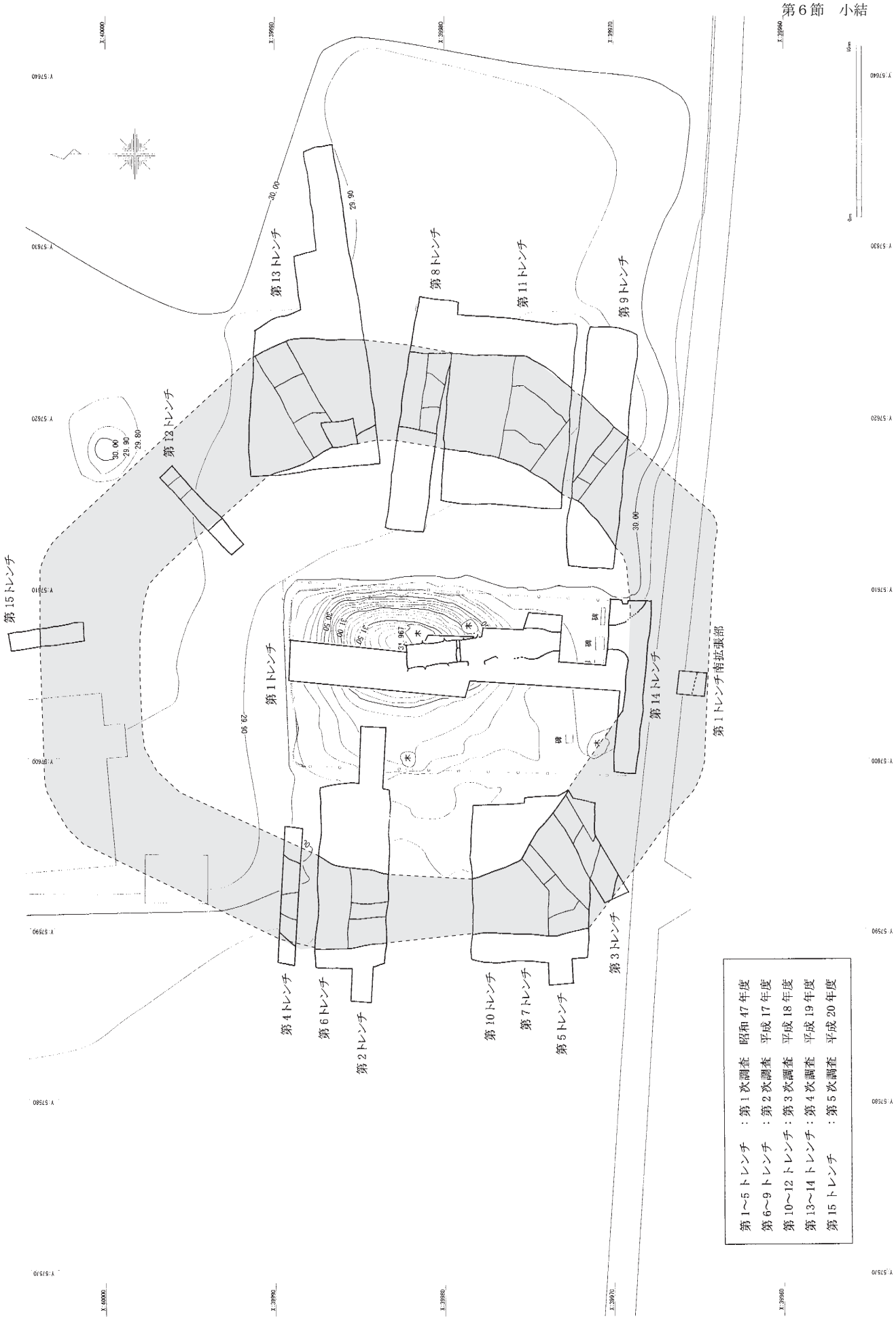
第６節　小結

前節までの事実記載をふまえ，本節では第４次・第５次調査における成果をまとめる。

古墳の墳形について　昭和 47 年に実施した第１次調査から今次調査に至るまで，大小合わせて 15 のトレンチを設定し，周溝の確認を行ってきた。これらを第１号墳の測量図に落としたものが第 12 図である。墳丘の東西の周溝プランの大半を確認したことになり，墳形について多くの示唆を与えてくれる。とくに外堤部のプラン直線的なラインを描くことについては疑う余地がない。これが『吉田古墳Ⅱ』以来，吉田古墳が多角形墳，形状からすれば八角形墳であるという説を提起する最大の理由である。しかしながら墳裾部については，一部に稜角ともみられる偏角点が認められるものの，全体としてはいびつであり，円形とも多角形ともとれる曖昧なプランであることも確かである。吉田古墳が八角形墳ではなく，いびつな円墳，という見方も一方では提起できる。ただしその場合，適正な企画を以て造営するはずの古墳において，なぜいびつなプランを描いたのかを説明する努力は必要であろう。少なくとも那珂川中流域の同規模の円墳の調査事例において，かかるいびつな円墳の事例は見られない。とするならば，『吉田古墳Ⅱ』においても述べたように，現時点では八角形墳として考えたほうが理解しやすいものと思われるのである。

いずれにせよ今次調査においても，『吉田古墳Ⅱ』同様，吉田古墳の墳形について結論付けられるための情報は得られなかった。八角形墳説と円墳説の双方について可能性を残す結果となったのである。吉田古墳周辺は宅地化が進んでいるため，多角形墳か否かを確認するための十全なトレンチ設定は望むべくもなかった。範囲確認調査は一環して，所与の条件下での調査を余儀なくされたのである。それでもなお，第５次調査まで範囲確認調査を実施し，現況において調査可能な範囲はほぼすべてトレンチを入れ，周溝の確認を行った。その中で墳形の確定に至らなかったのは残念なことであった。将来，史跡整備事業の進捗によって状況が変化し，追加調査が可能となれば，改めて調査のメスを入れる必要があろう。その際，墳形の確定においては，墳丘北側の周溝確認が決め手となることは言うまでもない。

墓道の確認　今次調査におけるもう一つの成果は，第 14 トレンチにおける墓道の確認である。残念ながら遺構の切り合いが激しく，また調査範囲も狭かったため，全貌を把握することは叶わなかった。しかしながら土層断面の確認から，墓道は複数回掘り返されながら埋没したことが明らかとなった。かかる掘り返しを，墓前祭祀の痕跡として疑う余地はあるだろう。墓道は第１次調査における第１トレンチでも確認されている。現況の石碑の直下に墓道が伸びていることは明かであり，今後，墓前祭祀に係る何らかの知見を得ることも期待できよう。（関口）



第12図　第１～５次調査で検出した石室・周溝（網かけは周溝推定ライン，Ｓ＝1/300）

第Ⅳ章　吉田古墳の営造とその意義

はじめに

史跡「吉田古墳」は，横穴式石室奥壁に線刻装飾をもつ終末期古墳として，かねてより学界で広く知られるところであった。しかし，後世の土取りをはじめとした攪乱により，その墳形については定説をみず，遺存する墳丘の形状から方墳である，あるいは円墳であると想定されていたにすぎなかった。出土遺物の少なさも手伝って，国指定の史跡であるにも関わらず，その編年的位置付けや営造の歴史的背景は依然不明なままであったのである。

指定された史跡は，それが歴史を物語る重要な資料として包括的に把握され，保存・活用が図られるべきである。我々に遺された解決方策のひとつとして，埋葬のモニュメントたる盛土を区画する施設すなわち周溝の形状を確認することがあった。少なくともその形状を確認し，往時の墳形がどのようであったか推量する必要があった。そして周辺地域における他遺跡の調査成果の蓄積を俟って，吉田古墳自体を相対的に位置づけなければならない。そこで，我々は平成17年度より，墳丘周辺の範囲確認調査を実施したのである。こうした経緯をふまえ，ここではこれまでの範囲確認調査の成果とともに，近年の調査によって蓄積された周辺の遺跡の調査成果を加味し，吉田古墳営造の歴史的意義について検討してみたい。

第１節　吉田古墳の墳形

周溝の形状と墳丘企画　これまでの範囲確認調査の成果を統合すれば，少なくともその周溝の形状が円をなしていないのは明らかである。円形ならばもう少し緩やかな弧を描いて検出されると考えられるからである。かりに上部がやや削平されてしまっていたことを理由に美しい弧を描いたようには確認できなかったとしても，しかしこれまでの調査成果で明らかとなったように鈍角に開く角を持たないだろうし，不整形な円墳だったとしても，これほどまでの地上構築物においては，事前に企画（設計）をもって構築されたと考えられるのが穏当であるから，円形をなす周溝としては明らかに不適格な外形をなしているといわざるを得ない。少なくとも周溝の外形線は八角形をなしていたと考えるのが穏当であろう。するとそこで問題となるのは，周溝の外形線が八角形をなすからといって，墳丘の企画までもが八角形であったということができるだろうかということである。すなわち，①周溝の形状にあわせて墳丘自体も八角形であった，②周溝の外形線は八角形であるけれどもその内形線及び墳丘自体は円形であった，以上の２点の可能性を考えざるを得ないということである。しかし，②の場合については，未だかつて例がないことを考えると，現時点ではその可能性は低いといわざるを得な

い。また周溝の外形というもっとも分かりにくい部分に対して八角形を設計するという意図は，古墳のあり方としては容易に理解しがたいだろう。

さて，①の場合で当面考えておくとしたとき，吉田古墳において問題とすべきは，八角形墳にしばしばみられる護岸列石等を，未だ検出していないという点である。しかしこれには，墳丘そのものの遺存状況が悪いことを理由として挙げることはできるだろう。するとここでは，八角形墳として考えておかざるを得ないが，網干善教氏のいうような八角形が円の意識ではなく，方の意識として形成され，その根底に儒教思想があるとの見解が首肯されるのならば（網干2003），無論吉田古墳のようないびつな八角形墳を網干氏のいう「八角方墳」として扱うことはできない。すなわちたとえば，奈良県高市郡明日香村に所在する野口王墓古墳（天武・持統合葬陵）や中尾山古墳（文武陵）などのような畿内の八角形墳と同列に扱うことができないのは，脇坂光彦氏や小林利晴氏らが指摘するとおりである（脇坂1992，小林1997）。なぜなら，形を模倣することとその心性を共有することはまったく別個に考えなくてはならず，吉田古墳のような例は，むしろ形の模倣に止まっている可能性が高いからである。

第２節　吉田古墳の営造年代

横穴式石室の編年的位置　水戸市教育委員会による昭和47年の調査では，吉田古墳の埋葬施設の調査を行った。このとき，凝灰岩質砂岩を用いた切石積みで無袖型の横穴式石室が確認された。羨道部の状況は詳らかではないが，玄室平面形は長方形，奥壁は台形をなし，側壁が内傾する構造である。奥壁１枚，両側壁各３枚で構成され，天井石は３枚遺存していた。玄室内の床面は礫敷と推測されているが不明である。手前には，長方形の切り石を２枚並べた梱石が確認された。ここでは，吉田古墳の出土遺物に関する情報が希薄であるので，先学の成果を援用しつつ，上記のような特徴をもつ埋葬施設の編年的位置を考えることで，その営造年代を予察しておく。

生田目和利氏の集成的検討を参考に（生田目2005），那珂川流域において吉田古墳と同様の特徴の石室構造，すなわち凝灰岩切石台形組の系統をもつ古墳を検索してみると，石室内をベンガラで装飾した茨城県ひたちなか市虎塚古墳や同市大平古墳などが挙げられる。

虎塚古墳は全長56.5ｍの埴輪を樹立しない前方後円墳で，その石室は全長約4.6ｍを測る両袖型横穴式石室である。奥壁１枚，左側壁２枚，右側壁１枚，天井３枚，床面７枚の計14枚の板石によって構成される。東西両壁面より突出した袖石の上に架構された楣石と袖石間の床面上に置かれた框石によって構成された玄門が付き，羨道部は側壁３段積みの特徴をもつ（鴨志田2005など）。

大平古墳（１号墳）は全長約48ｍの埴輪を樹立しない前方後円墳で，その横穴式石室は半地下式の両袖型単室構造である。玄室の平面形はやや胴張りの長方形で，奥壁１枚，両側壁各３枚で構成され，天井石は１枚が遺存していた。側壁玄門寄りの切石は楣石を架構するため，右は中央部が凹状に，左はＬ字状にそれぞれ切り込まれている。

さて，生田目氏は，玄室側壁の左右同数，床面の敷石化，羨道部の切石積みと入口部の仕切石によ

る前室化は，型式学的組列の上で新しい傾向であることから，大平古墳を虎塚古墳に後出すると位置づけている（生田目2005前掲）。遺存度が悪いけれども，得られたデータを照合すれば，吉田古墳の横穴式石室は，大平古墳のそれに比較的近いと考えられよう。

吉田古墳の実年代　では，吉田古墳の年代はどれくらいに考えられるだろうか。今度は虎塚古墳や大平古墳の出土遺物とともに検討してみたい。虎塚古墳の前庭部出土の土師器坏をみると，口径12cm程度のものと20cm程度のものとの２種があり，いずれも口縁部直下に段もしくは稜をもち，器高が低く全体の形状が扁平になることから，集落出土の土師器などと対比して陶邑編年TK209型式並行とみておく。

大平古墳の周溝からは須恵器有蓋高坏身，提瓶，横瓶，甕が１点ずつ出土している。無文の頸部は短く丸底を呈した甕の外面には櫛掻きがみられ，これはあるいは丸底短頸壺と呼ぶべきかもしれない。横瓶の頸部は長く，フラスコ形瓶の祖形を思わせる。有蓋高坏の脚部は２段３方透しをもち，径は太い。身の口縁部は強く内傾し，受け部は未発達である。典型的なTK209型式並行のものとみて差し支えない。

出土土器からは，両者に大きな時期をみることはできないが，TK209型式並行期の段階の間に，横穴式石室の型式にみられた大きな変化が起こるのだとすれば，吉田古墳は，確実にTK209型式並行期よりも下るということができる。なお片平雅俊氏は，大平古墳石室内出土の板状立聞素環鏡板付轡をその特徴から７世紀第２四半期に位置づけている（片平2000）。これを筆者の年代観と照合すれば（渥美2008），大平古墳の帰属時期はTK209型式並行期でも比較的新相に位置づけられることになるだろう。虎塚古墳や大平古墳が埴輪を樹立しない最終末期の前方後円墳であることを考えれば，八角形墳でかつ石室奥壁に線刻装飾をもつ吉田古墳は，これらよりも後出するとみることができ，TK217型式並行期古相の段階，すなわち７世紀中葉に下る可能性が高いと考えられる。

第３節　吉田古墳営造の意義

古墳とは，一般的には３世紀から７世紀の間に盛土をもって構築される墳墓をいう。それがすなわち古墳時代であるかどうかは別としても，現代の天皇陵を考古学的に古墳と呼び倣わすことはしない。そして大型墳墓の被葬者像とはすなわち一般的に有力者とか在地首長層，畿内でいえば大王や豪族といったような政治権力者，少なくとも極めて限られた階層の人物であるといえ，相対的にハイ・ヒエラルヒーの人物であったと指摘することができよう。

他方，吉田古墳が営造されたと考えられる７世紀中葉といえば，政治史上の変革の時期にあたる。伝統的で古墳時代的な政治システムを更新し，新たに律令制に基づく政治システムを導入しようという時期なのである。古墳の被葬者をさきのように限定できるのであれば，この時代の造墓活動と政治権力の動向は不可分な関係にあるといえよう。ここでは，吉田古墳の営造時期前後の周辺地域における古墳・古墳群や官衙・集落遺跡の動向を踏まえながら検討を行うことで，吉田古墳営造の意義を考

える一助としたい。

官衙・集落遺跡の動向　６世紀後葉から７世紀中葉に至る時期すなわちTK43型式～TK217型式並行期に該当する周辺の集落遺跡をみてみると，発掘調査等で帰属時期の明らかな例に限定されるものの，水戸市域では，加倉井町南仲坪遺跡，同町松原遺跡，大塚町大塚新地遺跡，田谷町白石遺跡，元石川町小仲根遺跡，同町大谷原遺跡，大串町向山遺跡（大串殿山遺跡），同町梶内遺跡，塩崎町大串遺跡などが挙げられる。興味深いのは，吉田古墳の周囲にこうした時期の拠点的な集落跡が見いだせないこと，そして那賀郡家跡と目される台渡里廃寺跡及び台渡里遺跡（以下，台渡里遺跡群という）には，７世紀中葉以降に竪穴住居跡や掘立柱建物跡などを中心に形成されるものの，やはりそれ以前の遺構が確認されていないことである。

そして遺跡の性格から疑いなく政治的中心地として発展したと考えられる台渡里遺跡群において，６世紀後葉から７世紀前葉の遺構が発見できないのは，山中敏史氏のいう「非本拠地型」の官衙遺跡形成の類型を想起させる（山中1994）。また台渡里遺跡群の周辺には西原古墳群が存在するが，小規模な後期～終末期の群集墳が散見されるのみで，いわゆる在地首長層を被葬者像とみなし得るような古墳の存在は見当たらない。吉田古墳について考えてみると，その被葬者の権力基盤あるいは生活基盤ともいうべき集落遺跡等が周辺地域にみあたらず，この奥津城も官衙遺跡における「非本拠地型」の様相に類似しているということができよう。

他方，水戸市域では，台渡里遺跡群のほかにふたつの官衙遺跡の発見に至っているが，いずれも古墳や集落を周辺地域に伴う。例えば版築基壇の礎石建物が確認された田谷廃寺跡は，河内駅家に付属する官衙遺跡と目されているが，この周辺にはTK209～TK217型式並行期の竪穴住居跡が確認されている白石遺跡や，石棺が発見されたといわれる後期～終末期の白石古墳群がある。白石遺跡では，８世紀前葉に帰属するとみられる桁行36間，梁間２間の大型側柱掘立柱建物跡が確認されており，やはり河内駅家に関連する遺跡であるといわれる（樫村1993）。

また郡衙正倉院と目される台渡里廃寺跡長者山地区で確認された３間×３間の礎石建物と同様の規模と内容をもつ遺構が確認された大串遺跡では，その礎石建物の基壇下層からTK209型式並行期の竪穴住居跡が確認された。大串遺跡は，『常陸国風土記』（以下，『風土記』という）の記載のみられる平津駅家に付属する倉庫群もしくは那賀郡家正倉院別院と推定され，これの関連集落とみられる梶内遺跡でもやはりTK43～TK217型式並行期の竪穴住居跡がみつかっている。向山遺跡もこれらと同列に扱ってよかろう。周囲には詳細不明であるものの，後期古墳を含む可能性のある大串古墳群や７世紀に下る横穴式石室を含む北屋敷古墳群などがある。

以上のように整理してみると，ひとつの大きな問題点が浮かび上がってくる。すなわち，台渡里遺跡群にみられる官衙遺跡や吉田古墳を営造した主体者はいったいどのような人間なのか。ここでもうひとつ考えておかねばならないのは，当該地域における国造制との関わりである。国造制の成立をかつて白石太一郎氏が指摘したように７世紀中葉とみるならば（白石1991），台渡里遺跡群についての疑問のみは当面解決するし，吉田古墳の主体者は，外来の誰かと誤摩化すことも可能であろう。しかし，日高慎氏らが指摘するようにこれを６世紀後葉の前後に遡らせて，在地首長層すなわち古墳時代後期

後半の大型古墳の被葬者のような存在をもって国造制の成立とするならば（日高2001），いったい台渡里遺跡群にみられる官衙施設を営造した主体者はどのような人物なのか，そして吉田古墳を営造した人物，それは被葬者と置き換えられるけれども，それにはいったいどのような人物像を描けるのかを予察しておかねばなるまい。

国造制の成立と古墳の動向　白石太一郎氏が国造制の成立を７世紀中葉とみたのは，常陸における古墳の分布とその動向を検証した結果，とくに「茨城国造のクニ」および「仲国造のクニ」と推定される地域では，７世紀前葉以前には在地首長層が被葬者であると思われる大型古墳が複数確認されることにある。そしてこれらの地域では，７世紀中葉に至ってようやく１基程度の大型古墳に集約されていくのである。

しかしここで，十分に検討されなくてはならないのは，『風土記』に孝徳朝立評記事が遺されていることである。『風土記』自体の成立は，おおまかにいっても８世紀前葉とことと考えられるから，同時代資料たり得ないし，その記述に意図的な誇張表現や誤謬がある可能性もある。しかし，香島評や行方評などの「新置のコホリ」の立評を申請するにあたって複数の国造の名が記され，さらに詳しくみていくと，仲国造とされる人物が複数存在するように読むことができるのである。

ここで，これまでの文献史学の成果をどのように理解するべきかが問題となる。すなわち，磯貝正義氏，今泉隆雄氏，鎌田元一氏，薗田香融氏らの唱える孝徳朝全面的立評説（磯貝1962，今泉1972，鎌田1977，薗田1971）と，井上光貞氏，関晃氏，米田雄介氏らの唱える孝徳朝一部限定的立評説（井上1964，関1962・1964，米田1976）と，どちらの立場で議論するかである。かりに全面的立評説をとるとすると，白石太一郎氏のいう７世紀中葉の国造制成立という見解との整合性がとれなくなる。なぜなら，立評時期と国造制成立時期がほぼ同時となるのは，きわめて理解しがたいからである。というのも律令体制成立直前に行われた地方組織の改革がその当初から二重構造を呈していたとは考えにくい。たとえ立評が一部限定的であって，ひととき二重構造を呈していたとしても，それはそれ以前にすでに国造制が成立していた結果であったと考えるのが，政治史の流れからいっても自然ではなかろうか。

では国造制の成立は，少なくとも東国では６世紀後葉であったという立場から議論してみよう。ここで問題となるのは，白石太一郎氏の分析結果である。先述のとおり，「国造のクニ」と推定される地域のなかで，後期の大型前方後円墳や終末期の大型墳が複数確認されており，その被葬者として国造を推断できるほど突出した規模と内容をもつ古墳はひとつではない事実がある。しかしこうした問題については，「国造」が単なる職掌とか個人の地位のみをあらわすものでなく，その家あるいは一族そのものを示すという鎌田元一氏の指摘を踏まえれば，国造を称する人間が複数存在し得ることとなり，古墳群の分布のあり方と一応の整合性をもってくる。『風土記』にみえる既存の支配領域から分けて立評申請する記事も，従来のあり方に不満をもつ一族の誰かが，自らが固有に支配可能な領域を，別の国造とともに申請しているようにもみえ，興味深い。

吉田古墳と国造制　上記のような研究動向をふまえるとすれば，吉田古墳の被葬者像としてどのような人物を考えることができようか。もちろん国造とよばれる人々となんら関係のない人物像を浮かび

上がらせることは可能である。しかし横穴式石室奥壁に線刻装飾をもつ八角形墳の被葬者を，これらの動向とまったく関係なく論じることはきわめて難しいと思われる。

とはいえ，古墳時代前・中期で墳丘長100m前後あるいはそれを超える大型古墳は，旧水戸市域や那珂川河口付近の大洗町域などに多く，後期以降の大型前方後円墳や終末期の大型墳は，丘陵地帯に近い旧内原町域や那珂川左岸のひたちなか市域一帯に多いという白石太一郎氏の指摘をふまえるならば（白石1991前掲），ひたちなか市の虎塚古墳や大平古墳などの大型前方後円墳とそれに後続する終末期古墳を国造の墳墓とせずに，吉田古墳をそれの墳墓とするには無理がある。

先述の鎌田元一氏の学説にしたがうならば，吉田古墳が国造一族の墳墓であるという推定があってもよい。鎌田氏自身は，例えば行方評の立評申請者のひとりである壬生直夫子は行方地域に本拠地をおいていたのではないかというように，国造の地位とその本拠地との関係を固定的に考えているようだが，森公章氏は，そうして国造一族のみならず，それらに匹敵する新興勢力があって，かれらもまた国造に任じられたと考えているから（森1987），国造そのものをより弾力的に考える必要もありそうである。すると吉田古墳の被葬者とは，国造もしくはその一族，あるいはそれに対抗し得る勢力であったと柔軟に考えておく必要があるだろう。

装飾古墳としての吉田古墳　吉田古墳の被葬者像を論じるにあたって，付け加えておかねばならないことは，吉田古墳をはじめとして，常陸には多くの装飾古墳が確認されており，この偏在した分布の意味を古代氏族のひとつである多（意富）氏一族と関連させて論じられることがしばしばあるということである。川崎純徳氏は，短絡的に装飾古墳を多氏一族へ結びつけることに躊躇しているが，装飾古墳の出現をそうした外来勢力の到来によるものとみている（川崎1982）。また鴨志田篤二氏は，虎塚古墳の位置づけを行うなかで，その被葬者を多氏一族の仲国造その人であったと結論づけている（鴨志田2005前掲）。筆者は，このように在地首長層が自身の系譜を跡づけるなかでの擬制的な側面があった可能性を探らないまま結論づけてしまうことには躊躇を覚える。

ただし，川崎氏も鴨志田氏も東国における装飾古墳・横穴出現の歴史的意義を論じるにあたって，ヤマト政権による東北経営の問題について触れているのは興味深い。とくにその後における鹿島信仰の東北伝播の問題と関連させて論じている点で，仲国造の伝承上の始祖建借間命が，しばしば武神として信仰の対象となっていることとの関わりが説明されるのである。これまで多くの研究者によって指摘されてきたこととして，常陸における装飾古墳・横穴が７世紀以降突如出現し，太平洋沿岸部かもしくは交通の結節点にあたる位置に分布する点が，ヤマト政権による東北経営の活発化を示唆していると考えることができよう。

ところで，東国に分布する装飾古墳・横穴とその分布がもっとも密な九州との関連性を肯定する学説とそれを否定する学説が乱立するなかで，興味深いのは，虎塚古墳の装飾図文のように九州の装飾古墳のそれに類似するものがあるものの，吉田古墳のように系譜関係のまったく認められないものもあり，いずれの横穴式石室の構造も九州のものとは異なると指摘した生田目和利氏の研究である（生田目2002）。またこれにくわえて，装飾古墳・横穴が在来の古墳群のなかに出現するのではなく，７世紀に至って新たに形成された古墳群の盟主墳であることが圧倒的である点にも注意したい（生田目同

書)。

以上のことは何を意味するのか。それは，吉田古墳に限っていえば，新興の勢力が当該時期に急成長し，これまで未開の地であった交通の要衝地に奥津城を営んだと考えることができよう。そしてかれらは，従来型の定住的な生活基盤を必然的にもつのではなく，たとえば「海民」と呼ばれるような遊動的な集団であって，それを統括する首長層であった可能性もある。周辺地域に既存のあるいは同時期の集落の痕跡が認められないのもこのためといえば，より説明がつきやすいだろう。

結語

吉田古墳は，後世の著しい攪乱によりその墳丘は原形を止めておらず，さらに出土遺物が少ないこともあって，これまで歴史学的に相対化され，検討を重ねられることがなかった。本稿がその役割を十分に果たしたとはいい難いが，いくらかの問題点を明らかにすることはできたと思う。いずれにせよ吉田古墳は，石室奥壁に線刻装飾をもつ多角形墳として比類なき価値をもつものであって，現在水戸市域で進んでいる官衙・集落遺跡との対比によって，今後，７世紀という時代の変革期を考古学的に明らかにし得る価値をもつ終末期古墳として評価されよう。吉田古墳と古代常陸那賀地域の歴史的研究は端緒をついたばかりなのである。

（渥美）

おわりに

本書は，国指定史跡「吉田古墳」の３冊目の報告書である。平成18年３月に『吉田古墳Ⅰ』を上程して以来，早くも３年の歳月が流れたことになる。その間，水戸市史跡等整備検討専門委員が設置され，吉田古墳の調査に関して，多くの碩学にご指導を仰げる環境が整った。そして第３次調査においては，吉田古墳が従来の定説であった方墳ではなく，八角形墳であるという見方が高まるという，注目すべき知見を提起することになった。誰もが予想し得なかった発見であり，その真偽や意義については，今後も議論の的となっていくことは疑いない。

＊　　＊

平成17年度から実施してきた吉田古墳第１号墳の周溝確認は，現況で調査可能な部分はほぼ調査し尽くした。したがって本書の上程により，範囲確認調査は一つの区切りを迎えることとなる。

現在の吉田古墳の史跡指定範囲は，墳丘周辺のわずか126㎡であるが，本来の古墳の範囲はそれを大きく上回ることが，昭和47年の第１次調査の成果から一般に知られることとなった。古墳の保護・保存をはかる上からは，周溝を含む古墳全体を史跡に指定すべきなのは自明であった。しかし，その正確な範囲は掴みかねており，結局史跡の追加指定には至らないまま，現在に至っている。だが平成17年度から再開した第２次～５次調査により，吉田古墳の東西南北の周溝は全て確認され，墳形の確定はともかく，概ねの範囲はほぼ確定した。史跡の追加指定にあたって十分な成果が得られたのである。本書を以て一つの区切りと位置づける理由はここにある。

＊　　＊　　＊

無論，吉田古墳に関して得られた成果の分だけ，課題も山積している。現段階における知見に基づく，吉田古墳の歴史的意義については，本書第Ⅳ章で渥美が披瀝した通りである。だが最後に渥美が述べるように，その歴史的意義に係る研究はそのスタートラインに立ったばかりであり，造営年代，被葬者，墳形，壁画の意味，古墳群としての吉田古墳の理解，在地社会における古墳の意義など，重要で興味深い事柄はいずれも調査・研究を深める余地がある。

そして最も興味深い課題は，この古墳をどのようにして，郷土の誇る歴史遺産として将来の世代に伝え，市民の皆さんのために活用していくか，ということである。その検討に向けての知見も，十全とは言えないが本書によりある程度は揃った。今年で石室の発見から95年が経ち，あと５年で一世紀を迎える。吉田古墳の調査・整備事業は，いよいよ第２段階に入ろうとしている。

吉田古墳の調査では，明利酒類株式会社様，加藤高蔵様，澤畑実様，加藤晴代様，鈴木廣子様，田口文明様をはじめとする近隣住民の皆様に，いつもながら一方ならぬご協力を賜わり，本書を上程することができました。ここに深謝の意を表し，本書を締めくくります。

（関口）

引用・参考文献

阿久津久・片平雅俊 1992「 常陸の後期古墳の様相 」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 国立歴史民俗博物館

渥美賢吾 2008「和泉陶邑窯出土須恵器の編年研究」『史葉』第２号　加藤建設株式会社

網干善教 2003 「終末期における八角方墳とその意義」『終末期古墳の研究』同朋舎メディアプラン（初出は1979『橿原考古学研究所論集』第５）

磯貝正義 1962「律令時代の地方政治」坂本太郎博士還暦記念会編『日本古代史論集』上巻　吉川弘文館

磯貝正義 1965「評造・評督考－郡字浄御原令始用説批判－」『山梨大学学芸部研究報告』第16号

井上光貞 1964「大化改新の詔の研究」『史学雑誌』第73巻第１・２号（1965『日本古代国家の研究』岩波書店に所収）

今尾文昭 2000「 叡尊，忍性・律宗系集団と大和の遺跡」『叡尊・忍性と律宗系集団』大和古中近研究会

茨城県 1930「吉田古墳」『茨城県史蹟名勝天然記念物調査報告』第１号

茨城県教育委員会 1982『重要遺跡調査報告書Ｉ』

茨城県教育財団 1993『一般国道６号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ｉ』

茨城県教育財団 2003『二の沢Ａ遺跡・二の沢Ｂ遺跡（古墳群）・ニガサワ古墳群』（茨城県教育財団文化財調査報告書第208集）

茨城県教育庁文化課編 2001『茨城県遺跡地図』（地図編･地名表編）茨城県教育委員会

茨城県史編さん原始古代史部会編 1974『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県

茨城県史編さん近世史第一部会編 1968『茨城県史料 近世地誌編』茨城県

茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編 1979『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県

茨城県立歴史館編 1991『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県

茨城県立歴史館編 1995『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』茨城県

今泉隆雄 1972「八世紀郡領の任用と出自」『史学雑誌』第81巻第12号

江原忠明編 1985『改訂 水戸の町名－地理と歴史－』水戸市役所

大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社

大森信英 1962「吉田古墳」『日本考古学辞典』日本考古学協会編　東京堂

大谷原遺跡発掘調査会編 2008『元石川大谷原遺跡－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第20集）

樫村宣行 1993「白石遺跡で検出された遺構について」『研究ノート』２号 茨城県教育財団

片平雅俊 2000「茨城県における風返稲荷山古墳出土馬具の位置」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会

鎌田元一 1977「評の成立と国造」『日本史研究』第176号

鴨志田篤二 2005『虎塚古墳－関東の彩色壁画古墳－』（日本の遺跡３）同成社

川口武彦 2002「水戸市栗崎町出土の有樋尖頭器」『婆良峰考古』第24号　婆良峰考古同人会

川口武彦 2005「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良峰考古』第27号　婆良峰考古同人会

川崎純徳 1982『茨城の装飾古墳』新風土記社

瓦吹 堅 2000「吉田古墳の銀環」『常総台地』第15号 常総台地研究会

瓦吹 堅 2003「国指定史跡吉田古墳発掘覚書」『新世紀の考古学』大塚初重先生喜寿記念論文集

郡司良一 1992『私の埋蔵文化財拾遺』第３集（私家版）

毛野考古学研究所編 2008『薄内遺跡（第１地点）－移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第18集）

国士舘大学牛伏４号墳調査団編 1999『牛伏４号墳の調査』 内原町教育委員会

国立歴史民俗博物館 1992『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集（東国における古墳の終末《本編》）

国立歴史民俗博物館 1999『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集（装飾古墳の諸問題）

国士舘大学牛伏４号墳調査団編 1999『牛伏４号墳の調査』 内原町教育委員会

小林利晴 1997「畿内の八角形墳と地方の八角形墳の比較」『東京考古』第15号

斎藤 忠 1952『装飾古墳の研究』吉川弘文館

斎藤 忠 1973『日本装飾古墳の研究』講談社

山武考古学研究所編 2005『台渡里廃寺跡－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)－』(水戸市埋蔵文化財調査報告書第２集） 水戸市教育委員会

白石太一郎 1991「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集

白石太一郎 2000『古墳と古墳群の研究』塙書房

白石太一郎編 2005『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館

鈴木素行 2000「大里糠塚古墳の埴輪－久慈川流域における大型の円筒埴輪について－」『婆良峰考古』第22号 婆良峰考古同人会

関晃 1962「大化の郡司制について」『日本古代史論集』上巻 坂本太郎博士還暦記念会編 吉川弘文館

関晃 1964「再び大化の郡司制について」『日本歴史』第197号

薗田香融 1971「国衙と土豪との政治関係－とくに古代律令国家成立期における－」『古代の日本』第９巻 角川書店（1981『日本古代財政史の研究』塙書房に所収）

多摩市教育委員会 1991『稲荷塚古墳－八角形墳の調査－』（多摩市埋蔵文化財調査報告 24）

地域文化財コンサルタント編 2005『大鋸町遺跡－グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第３集） 水戸市教育委員会

常澄村史誌編さん委員会編 1989『常澄村史 通史編』常澄村

東京航業研究所編 2006『大鋸町遺跡（第３地点）－市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第７集）

豊島区遺跡調査会 1998『陶磁器・土器 分類・計数基準』（豊島区教育委員会『伝中・上富士前Ⅱ』別冊）

鳥居龍蔵 1928「図画の存在する常陸の二古墳（下）」『武蔵野』第11巻第３号 武蔵野会編 誠志堂印刷出版部

生田目和利 2002「茨城県の装飾古墳と装飾横穴墓」『装飾古墳の展－彩色系装飾古墳を中心に－』第51回埋蔵文化財研究集会資料集 埋蔵文化財研究会・九州国立博物館誘致推進本部・福岡県教育委員会

生田目和利 2005「茨城県北部における前方後円墳以後と古墳の終末」『前方後円墳以後と古墳の終末』シンポジウム資料 東北・関東前方後円墳研究会

日考研茨城編 2006『台渡里遺跡－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第６集）

日考研茨城編 2007『米沢町遺跡（第５地点）－住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第13集）

日考研茨城編 2008『大串遺跡（第７地点）－介護老人福祉施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』(水戸市埋蔵文化財調査報告書第14集）

日高慎 2001「第３部 Ⅳ．古墳時代」『霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書』筑波大学考古学研究室・霞ヶ浦町教育委員会

水戸市 1995『水戸市北屋敷古墳』

水戸市大鋸町遺跡発掘調査会 1988『水戸市大鋸町遺跡』

水戸市教育委員会 1971『水戸市埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書（応急版)』

水戸市教育委員会 1976『水戸市埋蔵文化財（分布調査報告書)』

水戸市教育委員会 1982『常陸安戸星古墳』

水戸市教育委員会 1984『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（昭和58年度版)』

水戸市教育委員会 1995『水戸市北屋敷古墳』

水戸市教育委員会 1999『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成10年度版)』

水戸市教育委員会 2004『台渡里廃寺跡－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』

水戸市教育委員会 2005『台渡里廃寺跡－範囲確認調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第１集）

水戸市教育委員会編 2006『吉田古墳Ⅰ－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第１号墳の第１次・第２次発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第10集）

水戸市教育委員会編 2007a『吉田古墳Ⅱ－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第１号墳の第３次発掘調査報告書－』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第10集）

水戸市教育委員会編 2007b『平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第11集）

水戸市教育委員会編 2009『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』（水戸市埋蔵文化財調査報告書第22集）

水戸市史編さん委員会編 1963『水戸市史』上巻　水戸市役所

水戸市史編さん委員会編 1999『概説 水戸市史』水戸市役所

水戸市下畑遺跡発掘調査会 1985『水戸市下畑遺跡－市道酒門８号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

水戸市薬王院東遺跡発掘調査会 1990『薬王院東遺跡－千波中学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』

水戸市立博物館 1990『特別展 装飾古墳－地下を彩る名画の世界－』

三井考測編 2006『水戸城跡－三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書－』茨城県･水戸市教育委員会

宮崎報恩会編 1969『新編常陸国誌』常陸書房

山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

米田雄介 1976『郡司の研究』法政大学出版会

脇坂光彦 1992「八角形墳」『季刊考古学』第40号

写真図版

第13トレンチ調査風景

吉田古墳の位置（○内が吉田古墳，昭和23年４月米軍撮影）

トレンチ全景（東から）

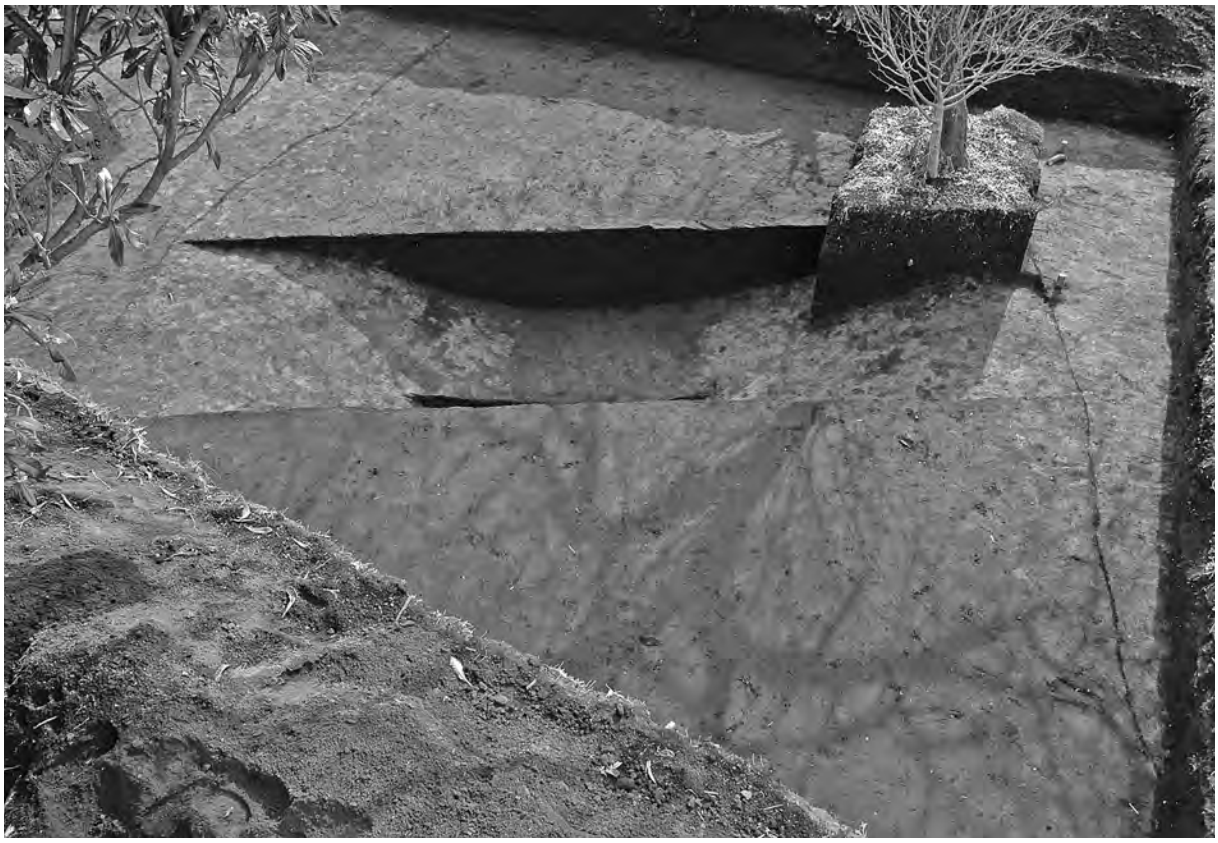
航空写真・第13トレンチ（１）

写真図版２

トレンチ全景（周溝部分，東から）

周溝検出状況（北から）

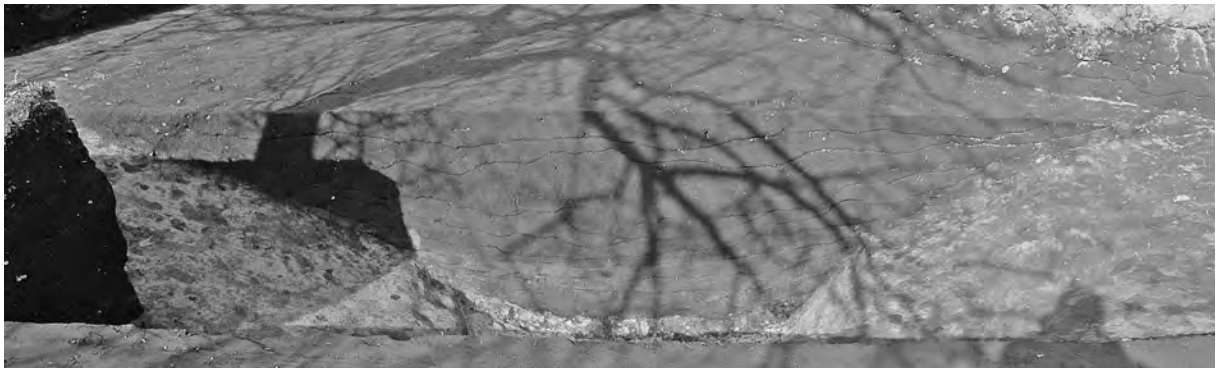
第13トレンチ（２）



周溝検出状況（北から）

周溝サブトレンチ（東から）

周溝底面（西から）



周溝土層断面（南から）

写真図版４

トレンチと第１号墳（南から）

トレンチ全景（東から）

墓道検出状況（南から）

墓道土層堆積状況（南から）

墓道土層堆積状況（北から）

墓道土層堆積状況（東から）

墓道実測風景

第14トレンチ（２）

写真図版６

トレンチ全景（西から）

周溝土層堆積状況（西から，G-H ライン）

トレンチ土層堆積状況(北から,I-Jライン付近)

墓道周辺作業風景

７号遺構検出状況（南から）

周溝屈曲部（G-H ライン付近）

周溝検出状況（北から）

周溝検出状況（南から）

トレンチ土層堆積状況（西から）

作業スタッフ（第４次調査）

第15トレンチ・作業スタッフ

写真図版８

1

2

3

4

5

6

7

8

9

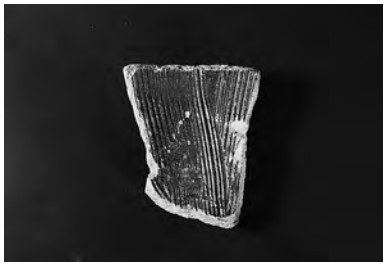
10 表

10 裏

11

12

13


14

16

17

18

第４次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	よしだこふん　さん
書　　名	吉田古墳　Ⅲ
副 書 名	史跡整備計画に伴う吉田古墳群第１号墳の第４・５次発掘調査報告書
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告　第23集
編集者名	関口慶久
著 者 名	関口慶久，川口武彦，渥美賢吾
編集機関	水戸市教育委員会
発行機関	水戸市教育委員会
所 在 地	〒310-8610　茨城県水戸市中央１－４－１　☎ 029-224-1111
発行年月日	2009（平成21）年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
吉田古墳群（よしだこふんぐん） 第１号墳（だいいちごうふん）	茨城県水戸市（いばらきけんみとし） 元吉田町（もとよしだちょう）347 他（ほか）	8201	72	36° 21′ 30″	140° 28′ 29″	第４次調査 2007.11.14 ～ 2008.1.7	107.17 ㎡	史跡・環境整備計画に伴う調査
						第５次調査 2008.10.9 ～ 2008.10.17	4.4 ㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田古墳群（よしだこふんぐん） 第１号墳（だいいちごうふん）	包蔵地	縄文	なし	縄文土器	国指定史跡の装飾古墳「吉田古墳」の発掘・測量調査。 本報告書では吉田古墳群第１号墳の第４次・第５次発掘調査成果および，古墳群内の広域測量調査成果を掲載。 第４次調査では周溝および墓道を検出した。第５次調査では古墳の北側の周溝の範囲を初めて確認した。 これらの調査により第１号墳の範囲はおおむね確定し，既刊の『吉田古墳Ⅰ』『同Ⅱ』とともに，吉田古墳の性格をめぐる議論を総括している。
	集落	弥生	なし	弥生土器	
	古墳群	古墳	周溝	埴輪・土師器・須恵器	
	集落	奈良･平安	なし	土師器・須恵器	
	村落	近世	道路	磁器・陶器・土器・鉄製品	
	村落 都市	近～現代	なし	磁器・陶器・土器・煉瓦・硝子製品	

※北緯・東経は測地系 2000（世界測地系）対応

水戸市埋蔵文化財調査報告

第１集	**台渡里廃寺跡**－範囲確認調査報告書－	2005年３月
第２集	**台渡里廃寺跡**－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)－	2005年４月
第３集	**大鋸町遺跡**－グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2005年８月
第４集	**台渡里廃寺跡**－市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)－	2006年３月
第５集	**台渡里遺跡**－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2006年３月
第６集	**吉田古墳**Ⅰ－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第１号墳の第１次・第２次調査報告書－	2006年３月
第７集	**大鋸町遺跡(第３地点)**－市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2006年３月
第８集	**坏遺跡(第３地点)**－ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2007年３月
第９集	**坏遺跡(第４地点)**－プランタンコリーヌⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2007年３月
第10集	**吉田古墳**Ⅱ－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第１号墳の第３次発掘調査報告書－	2007年３月
第11集	**平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書**	2007年３月
第12集	**アラヤ遺跡(第２地点)**－市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2007年３月
第13集	**米沢町遺跡(第５地点)**－住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2007年３月
第14集	**大串遺跡(第７地点)**－介護老人福祉施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2008年３月
第15集	**台渡里遺跡(第39次)**－公共下水道管埋設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2008年３月
第16集	**渡里町遺跡(第５地点)**－市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2008年６月
第17集	**渡里町遺跡(第６地点)**－市道常磐34,275号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2008年６月
第18集	**薄内遺跡(第１地点)**－移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2008年８月
第19集	**堀遺跡(第９地点)**－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2008年９月
第20集	**元石川大谷原遺跡**－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2008年12月
第21集	**台渡里１**－平成18年度長者山地区範囲確認調査概報(台渡里第30次)－	2009年３月
第22集	**平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書**	2009年３月
第23集	**吉田古墳**Ⅲ－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第１号墳の第４・５次発掘調査報告書－	2009年３月

水戸城跡－三の丸土塁および堀の復旧に伴う工事・調査報告書－	2006年９月

水戸市埋蔵文化財調査報告 第23集

吉田古墳Ⅲ

－史跡整備計画に伴う吉田古墳群第１号墳の第４・５次発掘調査報告書－

2009年３月20日　印刷

2009年３月31日　発行

編集・発行　**水戸市教育委員会**　〒310-8610　茨城県水戸市中央1-4-1　TEL:029-224-1111

印刷　**山三印刷株式会社**　〒310-4153　茨城県水戸市河和田町4433-33　TEL:029-252-8481

吉田古墳
史跡
吉田古墳
国指定文化財
National Cultural Property
史跡
吉田古墳